The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イブン・ハウカルのマグリブ図
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2009, 1, p. 247-277
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イブン・ハウカルのマグリブ図

竹　田　　新
TAKEDA Shin

Ibn Hawqal's Map of al-Maghrib

Keywords：Islamic Cartography, the Balkhi School, the Maghreb, the Mediterranean, the Tenth Century
キーワード：イスラーム地図学，バルヒー学派，マグリブ，地中海，10 世紀

Ⅰ）はじめに

近代以前のイスラーム地図学には，2 大主流があった。一方は，フワーラズミー al-Khuwārazmī（Abū Ja'far Muḥammad b. Mūsā, 232AH/846 年以後没）などの取り組みに始まる，経緯度などを利用する数理的な地図学であり，もう一方は，バルヒー al-Balkhī（Abū Zayd Aḥmad b. Sahl, 322AH/934 年没）を嚆矢とする，幾何学的図形を駆使する非数理的な地図学の系統である[1]。数理的地図の研究は近年，Sezgin［1987,2000］によって精力的に進められている。他方，非数理的地図は Miller［1926－31（rep.,1994)］によるイスラーム・アトラスの金字塔的な研究以降，大きな成果を上げているとは言い難い[2]。

今回，Miller が取り扱わなかったマグリブ al-Maghrib 図[3] の中から，イブン・ハウカル Ibn Ḥawqal（Abū 'l-Qāsim Muḥammad b. 'Alī, 380AH/990 年頃没）のものを取り上げ，紹介してみたい。アラビア語による記載を有するこの図は当時の他の地図に比べて，圧倒的に情報量が多く，10 世紀の地中海イスラーム世界の交易活動などの断面を伝える貴重な資料と言える。さらに，利用者にとって便利なのは，その地図を付した地理書の本文中に，地図の説明が記されていることである。この地図の説明部分に関しては，Kramers & Wiet による仏訳［1964（rep.,2001)］があるが，仏訳では，地名の同定・比定が不備な場合がかなり見られる。また，地図に番号を振ってあるのだが，欠番があったり，番号が

1　竹田［2004, 2008］
2　バルヒー系統の地図を扱ったものとして，Kramers［1932］，Shawkah［1969］，al-Shāmī［1981］，Aswad［1984］，Tibbetts［1992］，竹田［2005］などがある。
3　Miller［1926－31（rep., 1994)］は，イスラーム圏諸地方図を扱うイスラーム・アトラスに，マグリブと地中海を含めない。

地図上の記載に一対一対応していない部分も見られる。また，この図に関しては，そのイタリア半島部分を対象としたBeckingham［1971］の研究がある。そのほか，Miquel［1975］やTibbetts［1992］，al-Shāmī［1981］などにも，この図に対する言及が見られる。

本稿は以上の成果を踏まえて，Kramers & Wietの仏訳を訂正する意味もあり，まず，地図の記載箇所を番号で表わし，その番号を入れて，地理書本文中にある地図の説明部分を翻訳する。その後，地図の内容について，地域別に分けた多少の考察を加え，もって「イブン・ハウカルのマグリブ図」という資料の紹介とする。なお，本稿で用いるのは，イスタンブルのTopkapi Sarayi Müzesi Kütüphanesi所蔵写本Arab.3346（479AH/1086年）の地図と，主にその写本に基づいてKramersが校訂したイブン・ハウカルの地理書『大地の姿』*Kitāb Ṣūrat al-arḍ*［Leiden, 1938（rep., 1967）］である。

II）イブン・ハウカルとその地図について

イブン・ハウカルは，ジャズィーラal-Jazīrah（上メソポタミア）出身のアラブ人であり，若い頃から地理学に関心を持ち，331AH/943年にバグダードBaghdādを旅立って以来，商売をしながら，イスラーム圏のほぼ全域を巡り歩き，ファーティマ朝のエジプトMiṣrを訪問後はイスマーイール派の宣教員（dāī）になったとも言われる[4]。そして，こうした諸国遍歴の途中，イスタフリーal-Iṣṭakhrī（Abū Isḥāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Fārisī, 350AH/961年頃没）に会い，この人物によるイスラーム圏地誌『諸道と諸国』*K. al-Masālik wa-'l-mamālik*の地図と本文中の誤謬を直すよう頼まれたらしい[5]。その結果，イブン・ハウカルは356AH/967年以前に，地図を付けた彼自身の『諸道と諸国』を仕上げ，その後，367AH/977年頃と378AH/988年頃の2度にわたり手を加えて，最終的には『大地の姿』という作品を完成させた[6]と考えられる。

彼の『大地の姿』あるいは『諸道と諸国』は，大地の姿（形状）に続いて，アラブal-'Arabの地（アラビア半島）をはじめとする，西はマグリブ（北アフリカ）・アンダルスal-Andalus（イベリア半島），東はマー・ワラー・アン＝ナフルMā warā' al-Nahr（トランス・オクスィアナ）までの計20のイスラーム圏各「州」[7]を扱う。各「州」は，それぞれの範囲と地図の説明，主な地方や都市，旅程，収税などの記述であり，本書付属の地図は，大地の姿の章が円形の世界図1葉で，海洋と河川や各地域を描いたもの，アラブの地の章以下は長方形の各「州」図20葉で，いずれも諸境界や，都市と街道に加えて，山岳・河川・

4　Miquel［1967, pp. 301－2］

5　IḤ pp. 329－30

6　Miquel［1971, p. 787］

7　イスラーム圏20「州」は，アラブの地，ファールスFārisの海（インド洋），マグリブ［＋アンダルス＋シチリアṢiqillīyah］，エジプト，シリアal-Sha'm，ルームal-Rūmの海（地中海），ジャズィーラ，イラークal-'Irāq，フーゼスターンKhūzistān，ファールス，ケルマーンKirmān，スィンドal-Sind，アルメニアArmīniyahとアゼルバイジャンĀdharbayjānとアッラーンal-Rān（まとめてザカフカース），ジバールal-Jibāl（旧メディア），ダイラムal-DaylamとタバリスターンṬabaristān，ハザルal-Khazarの海（カスピ海），ホラーサーンKhurāsānとファールスとの沙漠（カヴィール・ルート両沙漠），スィースターンSijistān，ホラーサーン，マー・ワラー・アン＝ナフルである。

海洋・島嶼といった自然景観も示したもので，幾何学的な図形を多用した表現となっている。

こうした図形表現を用いる地図は，ササン朝ペルシアの行政的地理書・地図の影響を受けて発達したものと言われ[8]，前述のイラン系のバルヒーに始まり，同じくイラン系のイスタフリーを経て，イブン・ハウカルに受け継がれたものと考えられ，一般にバルヒー学派の地図と呼ばれる。バルヒー学派の地図の大きな特徴は，世界図・地方図を問わず，全体的に直線，円，円弧などで成り立っている，幾何学的に単純化されたスタイルの地図であることで，イスラーム世界にも伝わったプトレマイオス Claudios Ptolemaeus（168年頃没）などによる，投影法，縮尺，経緯度といった数理的な地図作成方法を用いない。そして，地図作成の第1の目的は，距離・方位を正確に表現することではなく，都市・山地・道路などの位相関係を表現することであった。特に道路に関しては，そのネットワークを示せば十分であったのだ[9]。

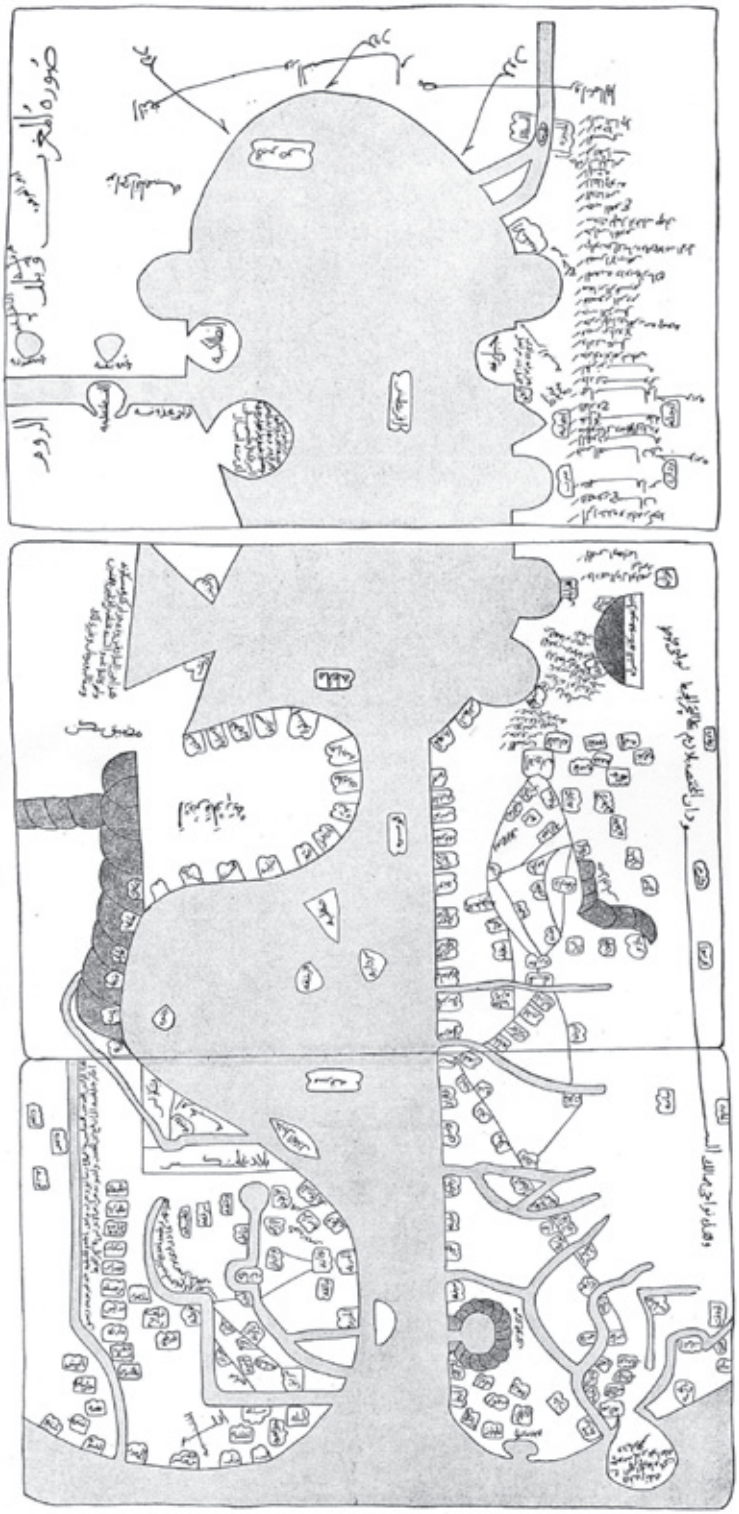
イブン・ハウカルの地図は基本的には，イスタフリーの『諸道と諸国』中に描かれている1葉の世界図と20葉のイスラーム圏各「州」図を継承したものであり，世界図とフーゼスターン Khūzistān 以東の諸「州」図は，イスタフリーのそれらを踏襲したものとなっている。とはいえ，河川の支流，山岳などに新たなものが加わり，やや詳しくはなっている。他方，マグリブ「州」，エジプト「州」，ルーム al-Rūm の海（地中海）「州」などは大いに改良された詳しいものになっている。そして，本稿で扱うこのマグリブ「州」図は，バルヒー学派の伝統に則って，アンダルスをマグリブに加えること[10]だけに止まらない。この図は正確には，「マグリブとルームの国（balad）の図」と記されており，ルームの国，すなわち，主にビザンツ帝国だが，イブン・ハウカルに従えばイタリア半島の非ビザンツ領なども含むことになる。そのこともあって，この図は彼の20「州」図中，最長のものであり，3部分からなり，北か北西を天としている[11]。

8　Kramers［1954, p. 152］，Krachkovskiy［1957, p. 206］

9　堀［1997, p. 268］

10　バルヒー学派のマグリブは，狭義のマグリブ（エジプトを除く北アフリカ）だけでなくアンダルスも含む。すなわち，イスラーム圏が一つの国家であった時代（ウマイヤ朝期）の行政的区分を採用している。バルヒー学派が活躍するアッバース朝時代には，イスラーム圏は複数の王朝に分かれていたのだが，彼らは理念としての一つのウンマ（イスラーム共同体），統一イスラーム国家を地図に描いたのである。

11　イスタフリーのマグリブ図［Leiden, Bibliotheek der Rijksuniversiteit, Cod. Or. 3101（569AH/1173）］に見られる東西南北表示から判断すると，イブン・ハウカルのこの図の天は北西ともとれる。

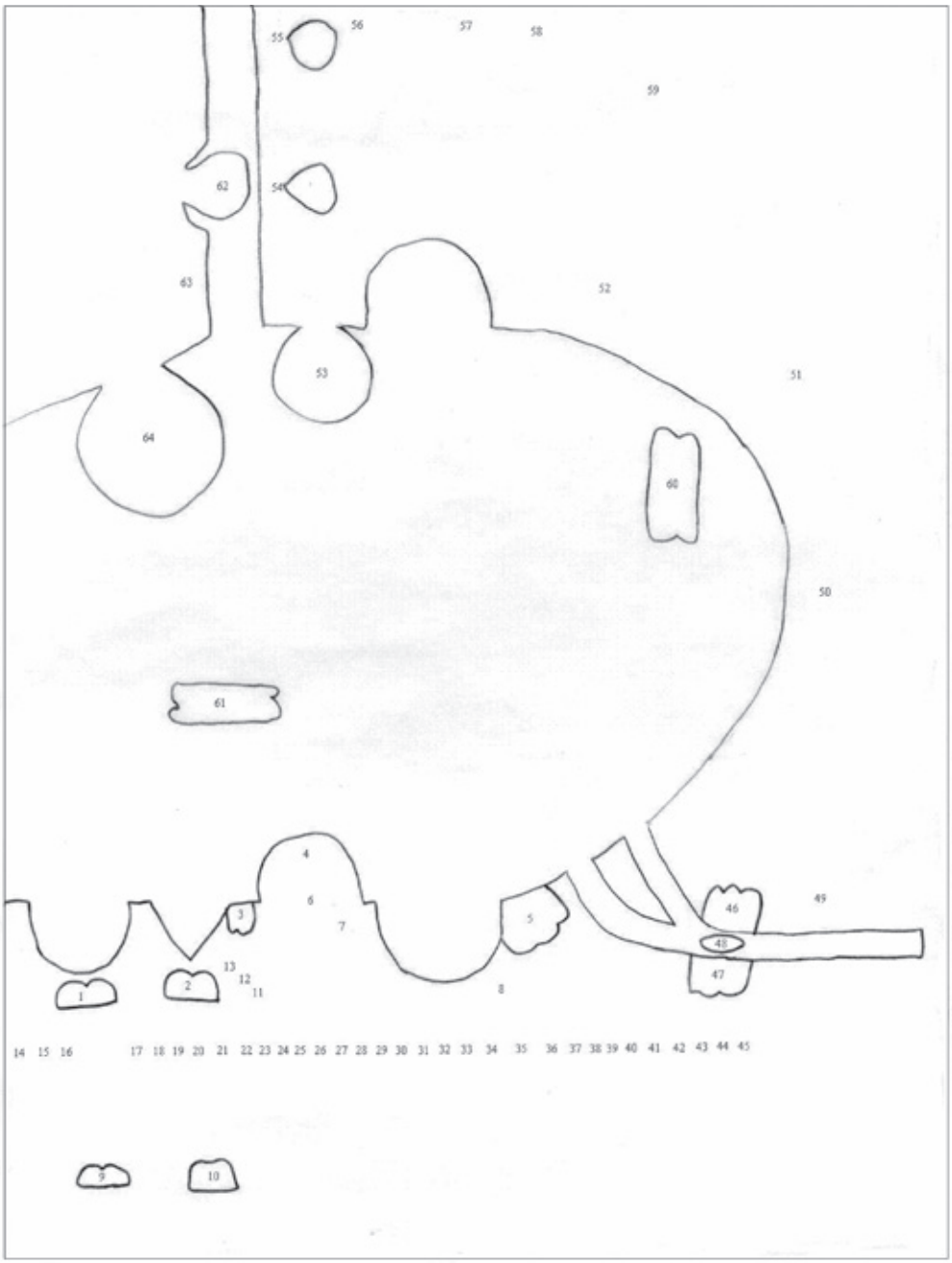


イブン・ハウカルのマグリブ図

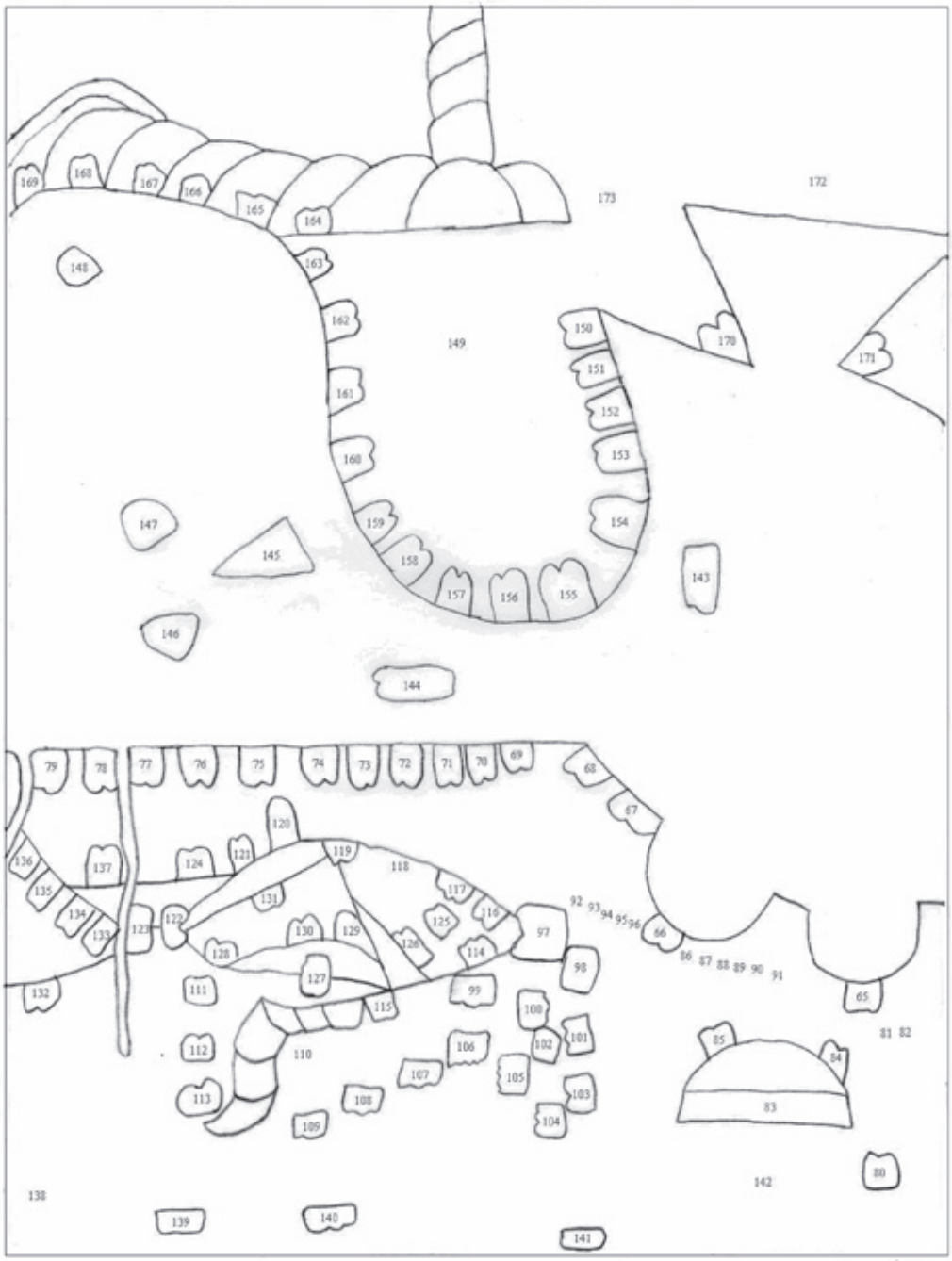
第１部分

第２部分

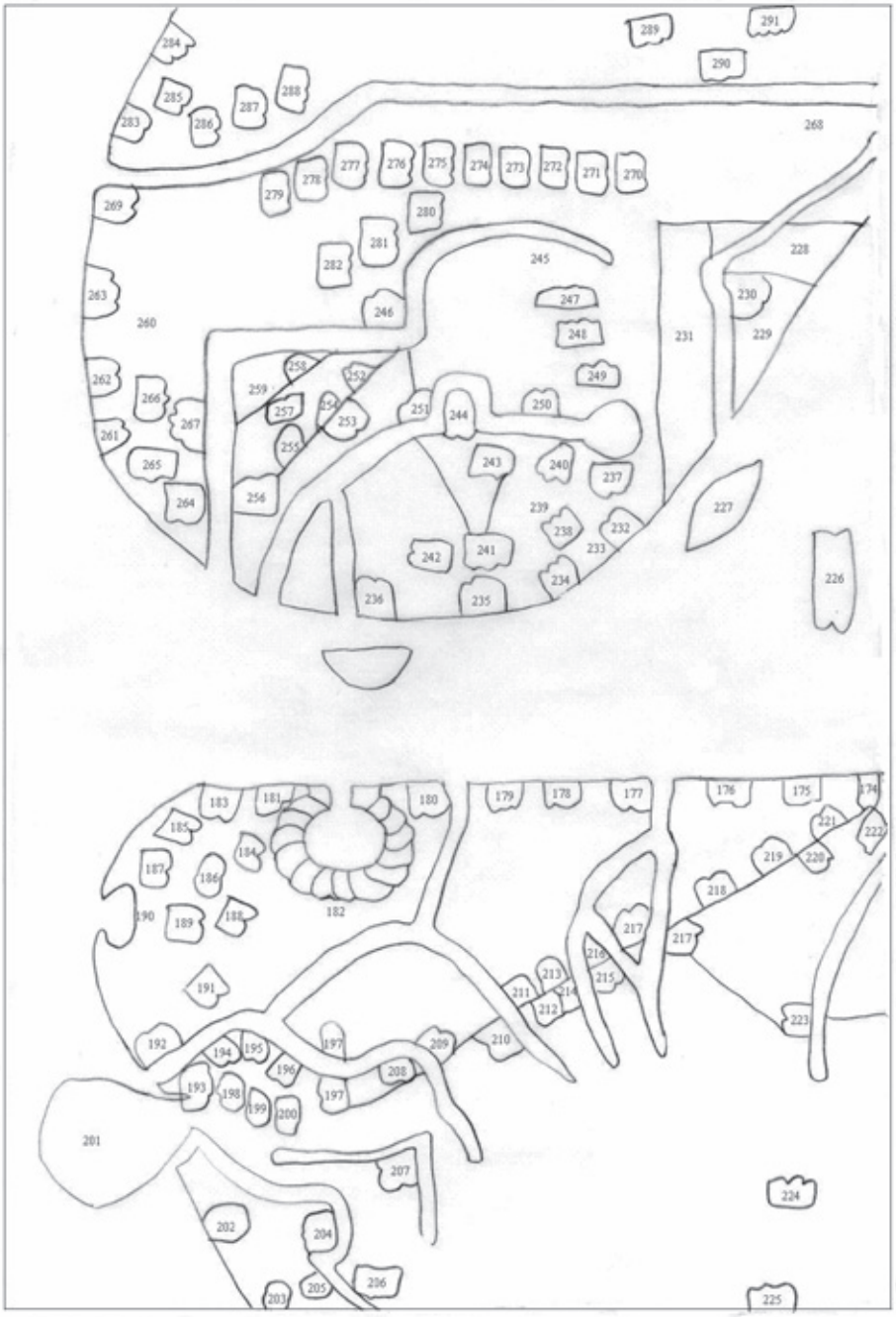
第３部分


55
56
57
58
59
62
54
63
52
53
51
64
60
50
61
4
6
3
7
5
46
49
48
47
13
12
11
1
2
8
14 15 16
17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45
9
10

マグリブ図　第１部分



マグリブ図　第２部分



マグリブ図　第３部分

Ⅲ）地図の説明部分の訳

a)「マグリブの地図の第１部分にある名前と文言との説明：[12]

地図の中央に海が描かれ，下側の海岸沿いに，町々のうち，左から，「スィルト Surt」[1]，「アジュダービヤ Ajdābiyah」[2]，「バルカ Barqah」[3] がある。次に「バルカ山」[4]，次に「アレクサンドリア al-Iskandarīyah」[5] の町がある。バルカ山の後方には，「バルカとワーディー・マヒール（マヒール川）Wādī Makhīl との間には３つの宿駅地がある」[6] が読まれる。その下方には，「マラーキヤ Marāqiyah」[7] があり，アレクサンドリアの左には，「宿駅地」[13] [8] が読まれる。スィルトに向かい合って，地図の下側の陸地に「ワッダーン Waddān 島（オアシス）」[9] があり，その右に，アジュダービヤと向かい合って，「アウジラ Awjilah 島（オアシス）」[10] がある。アジュダービヤとバルカとの間の陸地には，「ムハンマディーヤ al-Muḥammadīyah」[11]，「タファルブー Tafarbū(?)」[12]，「ターカナスト Tākast（Tākanast）[14]」[13] が読まれる。そして，下側の内陸部には，数多くの名前を含むリストがある。それらは左から右へ，「ラーシダ al-Rāshidah[15] とガーバ・ラクート Ghābat Rakūṭ」[14]，「クスール・ハッサーン Quṣūr Ḥassān」[15]，「マグマダース（あるいはマグダース）Maghmadās（Maghmadāsh）/Maghdās[16]」[16]，「カブル（あるいはカスル）・アル＝イバーディー Qabr al-ʻIbādī/Qaṣr al-ʻIbādī [17]」[17]，「ヤフーディーヤ al-Yahūdīyah（al-Yahūdīyatayn）[18]」[18]，「マンフーシャー Manhūshāy（Sabkhat Manhūshā）[19] とそこからズクザム Zuq-zam(?)」[19]，「ナヒール・カフタバ Nakhīl Qaḥṭabah」[20]，「ファールージュ al-Fārūj」[21]，「バニー・アブルワー Banī Abluwā(?)」[22]，「ワーディー・マスーシュ Wādī Masūsh」[23]，「ジャルヌーバ al-Jarnūbah(?)」[24]，「ジュラーワ Jurāwah(?)あるいはタイム・ライライン Taym Laylayn」[25]，「ワーディー・マヒール（マヒール川）」[26]，「カスル・バニー・ターズーラー Qaṣr Banī Tāzūlā」[27]，「カラム・アル＝ジャッバール Karam al-Jabbār とその近くのハマワイヒ Ḥamawayh(?)」[28]，「ジュッブ・アッ＝ラバル Jubb al-Rabal(?)[20]」[29]，「クスール・アッ＝ルーム Quṣūr al-Rūm」[30]，「マガーイル・ラキーム Maghā'ir al-Raqīm[21]」[31]，「アカバ al-ʻAqabah [32] とその手前のラマーダ Ramādah」[32]，「カスル・アル＝アブヤド Qaṣr al-Abyaḍ

---

12 IḤ pp. 62－3

13 この語は［14］以下のことを指し示すために，地図に書き込まれたものである。後註 82 を参照。

14 Tākanīst：IKh p. 85，Tākanast：Q p. 222；M p. 244；Id p. 317

15 al-Rāshidīyah：M p. 245，al-Rāshidah：B p. 653

16 Maghmadāsh：IKh p. 86g；Q p. 224；M p. 245，Maghdās：B p. 653，Qaṣr Maghdāsh：Id p. 313

17 Qabr al-ʻIbādī：IKh p. 86；Q p. 224，Qaṣr al-ʻIbādī：Yb p. 344；M p. 245；B p. 760；Id p. 314

18 al-Yahūdīyatayn：IKh p. 86；Q p. 224；M p. 245，al-Yahūdīyah：Yb p. 344；Id p. 314

19 Sabkhat Manhūshā：IKh p. 86，Sabkhat Manhūsā：Q p. 224；M p. 245，Manhūshah：Id p. 314

20 Jubb al-Raml：IKh p. 117；Yb p. 342；Q p. 229

21 Maghār al-Raqīm Id p. 317

（al-Qaṣr al-Abyaḍ）[22]」[33]，「ハーヌート・バニー・アビー・サーラ Ḥānūt Banī Abī Sārah すなわちハワーニート・アッ＝ラマル Ḥawānīt al-Ramal(?)[23]」[34]，「ハラーイブ（あるいはヒルバ）・アル＝カウム Khārā'ib al-Qawm/Khirbat al-Qawm[24]」[35]，「スィッカ・アル＝ハンマーム Sikkat al-Ḥammām<Sikkat al-Ḥimār[*sic*]>[25] あるいはキバーブ・マアーン Qibāb Ma'ān[26]」[36]，「ジュッブ・アル＝アウサジュ Jubb al-'Awsaj」[37]，「カナーイス al-Kanā'is[27]」[38]，「ターフーナ al-Ṭāḥūnah」[39]，「ハニーヤ al-Ḥanīyah（Ḥanīyat al-Rūm）[28]」[40]，「ザート・アル＝フマーム Dhāt al-Ḥumām」[41]，「ファム・アル＝グラーブ Fam al-Ghurāb」[42]，「ミナー al-Minā(?)[29]」[43]，「タルヌート Tarnūṭ」[44]，「ザート・アッ＝サーヒル Dhāt al-Sāḥil」[45] である。

アレクサンドリアの右にはナイル al-Nīl 川（nahr）口が描かれ，川沿いには，川が枝分かれする手前に「フスタート al-Fusṭāṭ」[46] の町がある。それに向かい合って対岸には「ギーザ al-Jīzah」[47] があり，両者の間に「ゲジーラ al-Jazīrah」[48] がある。ナイルの上流には，川を横切って「エジプト Miṣr の諸境界（ḥudūd）とエジプトの諸地方（a'māl）」[49]，その上方には「シャーム（大シリア）al-Sha'm の諸境界」[50]，次いで「スグール al-Thughūr（ビザンツ帝国との境域地帯）の諸境界」[51]，次いで，その左に「カラムヤ Aqlīmiyah（Qalamyah）諸地域（nawāḥī）[30]」[52]] が読まれる。そして，その左，海沿いに「アンタリア / アッタレイア Anṭāliyah<Anṭākiyah[*sic*]>[31]」[53] が続く。その地点で，入り江が海から地図の上方へと進む。この入り江の近くの陸地には，右に「ニカイア Nīqiyah 湖」[54]，次いで「ニコメディア Niqmūdhiyah 湖」[55] がある。後者の湖の右，地図の最上端には「アナトリコン al-Nāṭulīq 地方（balad）」[56]，次いで「ヘラクレイア Hiraqlah 地方」[57]，次いで「サラフワ（あるいはサルフーフ）al-Ṣarahuwah/al-Ṣarhūh(?)の地（arḍ）」[58] が読まれる。 地図の最上端全体と平行に，「マグリブとルームの国（主にビザンツ帝国）との地図」[59] が書かれ，海には島々のうち，「キプロス Qubruṣ」[60] と「クレタ Iqrīṭush」[61] がある。

入り江の中央，左側には「コンスタンティノープル al-Qusṭanṭīnīyah」[62] の町がある。そして，その下方の海岸には「マケドニア Majdhūniyah 諸地域」[63]，次いで，その下方，

---

22 al-Qaṣr al-Abyaḍ：Yb p. 342；B p. 654

23 Ḥawānīt Abī Ḥalīmah：Id p. 318

24 Khirbat al-Qawm：IKh p. 84；Yb p. 342；Q p. 221；M p. 245；Id p. 318，Kharā'ib al-Qawm：B p. 648

25 Sikkat al-Ḥimār は Sikkat al-Ḥammām の誤記と考えられる。Sikkat al-Ḥammām：IKh p. 84；Q p. 221；M p. 245；Id p. 318

26 Manzil Ma'an：Yb p. 342，Qibāb Ma'ān：B p. 648

27 Kanā'is al-Ḥadīd：IKh p. 84，al-Kanā'is：Yb p. 342；B p. 648，Kanā'is al-Jūn：Q p. 221，Kanā'is al-Ḥarīr：M p. 245；Id p. 318

28 Ḥanīyat al-Rūm：IKh p. 84；Q p. 221；M p. 245；Id p. 318，Ḥanīyah：B p. 648

29 al-Minā：Yb p. 342；B p. 646 に従う。Kramers & Wiet［1964 p. 59］は Faiy，すなわち al-Fayy と読む。

30 Qalamyah：IKh p. 117；Q p. 258；Iṣ p. 50；Yt IVp. 392

31 Kramers の校訂に従う。

海へ出る円形の陸地の舌には「ペロポネソス Bilubūnis の地で，その周囲は 1 千アラビア・マイル（mīl）あり，そこには，ルームに属する諸民族がおり，70 余りの要塞があり，この地の端は陸地の方向から狭くなっており，カスミーリー Kasmīlī，すなわち 6 マイルと呼ばれる」[64] が読まれる。」

b)「マグリブの地図の第 2 部分にある名前と文言との説明：[32]

海岸の下方には，町々のうち，右から，「トリポリ」Aṭrābulus/Ṭarābulus」[65]，「ガーベス Qābis」[66]，「スファックス Asfāqus」[67]，「マフディーヤ al-Mahdīyah」[68]，「スーサ Sūsah」[69]，「ケリビア Iqlībīyah/Qalībīyah」[70]，「チュニス Tūnis」[71]，「タバルカ Ṭabarqah」[72]，「マルサ・アル＝ハラズ Marsā al-Kharaz」[73]，「ボーヌ Būnah」[74]，「マルサ・アッ＝ダジャージュ Marsā al-Dajāj」[75]，「アルジェ Jazā'ir Banī Mazghannāy <Zaghannāy[*sic*]>/al-Jazā'ir[33]」[76]，「ターマドフース Tāmadfūs」[77]，「シェルシェール Ashrashāl」[78]，「ブレシュク Barashk<Sh.r.t.f.l[*sic*] >[34]」[79] が描かれている。そして，トリポリに向かい合って，地図の下方には，「フェッザーン Fazzān」[80] があり，その両者の間には，「ワーディー・アッ＝ラムル Wādī al-Rimāl（Wādī al-Raml）[35] あるいはカスル・イブン・アスワド Qaṣr Ibn Aswad」[81] が読まれ，その右には，「ムフタナー al-Muḥtanā あるいはハリーマー Ḥalīmā(?)」[82] がある。そして，その左には，山が描かれ，そこには「ナフーサ Nafūsah 山（ジャバル・ナフーサ）で，その住民は異端の徒である」[83] が読まれ，「シャルース Sharūs」[84] と「ジャード Jāduwā（Jādū）」[85] という二つの町がその山と接している。ナフーサ山とガーベスの町との間には，左から，「ワーディー・アジャース Wādī Ajās」[86]，「ビール・ザナータ Bi'r Zanātah あるいはイズリワール Izriwār(?)」[87]，「ターマディート Tāmadīt あるいはタージュラジト Tājrajit(?)」[88]，「アーバール・アル＝アッバース Ābār al-'Abbās あるいはファーディラート Fāḍilāt」[89]，「マンクーブ al-Manqūb，そして両者の間にサブラタ Ṣabrah」[90]，「ビール・アッ＝サファー Bi'r al-Ṣafā(?)すなわちビール・アル＝ジャンマーリーン Bi'r al-Jammālīn」[91] が読まれる。また，ガーベスの左には，左から，「ラフマテーン al-Laḥmatayn(?)」[92]，「ハドゥーバス Ḥadūbas(?)」[93]，「カラーヌス Falānis（Qalānus）[36]」[94]，「フンドゥク・イブン・ルクマーン Funduq Ibn Luqman(?)」[95]，「アイン・アッ＝ザイトゥーナ 'Ayn al-Zaytūnah[37]」[96] がある。

次に，陸地の中央の左側に，「カイラワーン al-Qayrawān」[97] の町が続く。カイラワ

---

32 IḤ pp. 63－5

33 Jazīrat Banī Mazghannā：Iṣ pp. 33, 34, 37，Jazīrat Banī Zaghannāyah：M pp. 28, 56, 217 ほか，al-Jazā'ir/Jazā'ir Banī Mazghannā：B p. 756，Jazā'ir Banī Mazghannā：Id pp. 222, 273，al-Jazā'ir li-Banī Mazghannā：Id p. 258，al-Jazā'ir/Jazā'ir Banī Mazghannāy：Yt IIp. 132

34 Barashk：Id pp. 222, 257, 272 に従う。

35 Wādī al-Raml：IKh p. 86, 88；Q p. 224；B p. 558；Id p. 11

36 Qalānus：M pp. 56, 217, 227

37 Bi'r al-Zaytūnah：IKh p. 86；Q p225，'Ayn al-Zaytūnah：Yb p. 347，al-Zaytūnah：M p. 246

ーンの下方の広地には，町々のうち，「カルシャーナ Qalshānah[38]」[98]，「マッジャーナ Majjānah」[99]，「カースィラ Qāṣirah(?)」[100]，「クスール al-Quṣūr（Madīnat al-Quṣūr）[39]」[101]，「ガフサ Qafṣah」[102]，「ハンマ al-Ḥammah（al-Ḥāmmah）[40]」[103]，「ナフザーワ Nafzāwah」[104]，「スィマータ Simāṭah」[105]，「カスティーリヤ Qasṭīliyah」[106]，「ネフタ Nafṭah」[107]，「ターミリール Tāmilīl(?)」[108]，「マダーラ Madālah」[109] がある。これらの町々の左に「アウレス Awrās 山」[110] が描かれ，その左には，町々のうち，「ビスクラ Biskarah」[111]，「タフーザー Tahūdhā」[112]，「バーディス Bādis」[113] がある。カイラワーンからは，一つの道がアウレス山へ通じている。その道沿いには，「スビーバ Sabībah」[114] と「バーガーイ Bāghāy(Bāghāyah)[41]」[115] という二つの町がある。もう一つの道は海岸により近く，「ウルブス / ラリブス al-Urbus」[116]，「ティーファーシュ Tīfāsh<Tīfāqīn[*sic*]>」[117]，「カスル・アル＝イフリーキー Qaṣr al-Ifrīqī」[118]，「スィーグス Tījis」[119]，「コンスタンティーヌ al-Qusṭanṭīnīyah <al-Qusṭīṭīnah[*sic*]>」[120]，「ミーラ Mīlah（Mīlā）」[121]，「マッガラ Maqqarah」[122] を通る。次いで，「ムスィーラ al-Masīlah」[123] に至るが，そこはシェルシェールで海に注ぐ或る川に沿っている。ミーラとこの川との間には「セティーフ Saṭīf」[124] の町があり，また，ティーファーシュとバーガーイとの間には，「オッバ Ubbah」[125] と「カスル・アッ＝ゼート Qaṣr al-Zayt」[126] との二つの町がある。バーガーイからは，一つの道がマッガラへと通じており，その道沿いに「ダール・マッルール Dār Mallūl<Mulūk [*sic*]>」[127] と「トブナ Ṭubnah」[128] とがあり，もう一つの道はトブナへと通じており，その道沿いに「ベレズマ Bilizmah」[129] と「ニガーウス Niqāwus」[130] とがある。スィーグスからマッガラへと通じる道沿いには，「デッガマ Dakkamah」[131] の町があり，その川の向かい側のムスィーラからは一つの道が左へと通じており，その道沿いに「イブン・マーマ Ibn Māmah（Māmā）」[132] がある。もう一つの道は上方へと曲がり，その道沿いに「ターマズキーダー Tāmazkīdā」[133]，「アシール Ashīr」[134]，「スーク・キラーン Sūq Kirān（? Karā, Kirām）[42]」[135]，「ミリアーナ Miliyānah」[136] がある。スーク・キラーンとこの川との間に，セティーフへ通じる道沿いに「ハーイト・ハムザ Ḥā'iṭ Ḥamzah[43]」[137] の町がある。地図の下端に並行して，「ここは黒人たち al-Sūdān の諸地域であり，環海に沿って彼らの国（bilād）とされたものである」[138] が読まれる。この文言と地図の端との間に，「ガリーワ（あるいはギヤール）Gharīwā/

38 Qalsānah：IKh p. 87，Qalshānah：Yb p. 347

39 Madīnat al-Quṣūr：M pp. 28, 56, 218, 246

40 al-Ḥāmmah：Yb p. 350，al-Ḥammah：B pp. 708, 751；Id pp. 276, 277；Yt IIp. 306

41 Bāghāyah：Yb p. 350, B pp. 710, 711, 713 ほか；Id p. 260；Yt Ip. 325，Bāghāy：M pp. 217, 227, 247；Id pp. 222, 263, 266 ほか

42 Sūq Karā：M pp. 29, 56, 219，Sūq Kirām：B p. 725

43 Sūq Ḥamzah：M pp. 56, 227－8 か。

Ghiyārū[44]」[139],「カーネム Kānim<K.z.m[*sic*]>[45]」[140],「ザガーワ Zaghāwah」[141] があり, 次いで, ナフーサ山と地図の端との間に,「ガオ Kawkaw の諸地域」[142] がある。

海には, 島々のうち,「マルタ Mālṭah」[143],「パンテルレリア Qawsarah (Qawṣarah)[46]」[144],「シチリア Ṣiqillīyah」[145],「サルデーニャ Sardānīyah」[146],「コルシカ Qurshiqah」[147], そして, 海の上方部分に「ジェノヴァ Jinuwah」[148] が描かれている。

円形の一画が上方の陸地から海に突き出しており, その内部に「カラーブリア Qalawriyah の地」[149] が読まれる。また, その海岸沿いには, 町々のうち, 右から,「カッサーノ Qassānah」[150],「ロッサーノ Rasyānah」[151],「コトローネ Qaṭrūniyah」[152],「サンタ・セヴェリーナ Sabrīnah」[153],「スティロ Istalwā (Istalū)」[154],「ジェラーチェ Jarājiyah」[155],「ペトラクッカ Baṭraqūqah<Faṭraqūqah[*sic*]>[47]」[156],「ボーヴァ Būwah」[157],「ペンテダッティロ Ibn Dhaqtal」[158],「レッジョ Rayyū」[159],「アマンテア Mantiyah」[160],「コセンツァ Kasashah」[161],「ビシナャーノ Masniyān」[162], 次いで, 無名の町 [163], そして, この町の上の山中に「サレルノ Shalūrī」[164], 次いで, その左には, 山々の中や海岸沿いに,「アマルフィ Malaf」[165],「ナポリ Nābul」[166],「ガエータ Ghayṭah」[167],「ピサ Bīsh」[168],「カッラーラ Qarrarah」[169] がある。そして, カラーブリアの地の右には, 陸地に入り込む三角形の入り江が描かれており, その両端には,「ブトリント Badhrant」[170],「オトラント Adhrant」[171] という二つの町がある。また, この入り江の海岸には,「ここはヴェネツィア湾 Jūn al-Banādiqīn で, ここには人の住む多数の島があり, マジャール人 al-Majāghirah<al-Shāghiyah [*sic*] >[48] などの民がいる。また, フランク人 Ifranjiyūn, オーストリー人？ Nimtūn<Y.m.nūn [*sic*] >, スラブ人 Ṣaqālibah, ブルガール人？ Burjān, そのほかの, 様々な言語が話される」[172] が読まれる。この文言の左, ヴェネツィア湾と山々との間には「スガナ渓谷 Maḍīq Sukan」[173] がある。」

c)「マグリブの地図の第 3 部分にある名前と文言との説明：[49]

下方の海岸沿いには, 町々のうち, 右から,「テネス Tanas」[174],「オラン Wahrān」[175],「ワーサラン Wāsalan (Āslān)[50]」[176],「アルジャクーク (あるいはアルシャク

44 Ghuyārū：B pp. 186, 874, 875 ほか, Ghiyārah：Id pp. 21, 26
45 Kramers & Wiet [1964 p. 61] は Kazam と読んでいる。
46 Qawṣarah：B p. 488；Id p. 583, 587；Yt IVp. 413
47 Baṭraqūqah：Yt IVp. 392 に従う。Kramers & Wiet [1964 p. 61] はカストロクッコ Qasṭarqūqah と読む。
48 Beckingham [1971 p. 76] に従う。
49 IḤ pp. 65－6
50 Aslan：B pp. 748, 749, 755 ほか, Aslān：Id p. 535

ール）Arjakūk/Arshakūl[51]」[177],「メリーリャ Malīlah」[178],「ナクール Nakūr（Nākūr）[52]」[179],「セウタ Sabtah」[180],「タンジール Ṭanjah」[181] がある。そして前両者（セウタとタンジール）の間に「マルサ・ムーサー Marsā Mūsā」[182], 次いで「アスィーラ Azīlā（Aṣīlā）[53]」[183], アスィーラの後方の陸地に「ザルール Zalūl」[184],「ジャルマーナ Jarmānah」[185],「ハジャル al-Ḥajar（Ḥajar al-Nasr）[54]」[186],「ターワーラト Tāwārat(?)[55]」[187],「バスラ al-Baṣrah」[188],「アクラーム al-Aqlām」[189], その左に「アルヤグ Rīghah/Aryagh 湖[56]」[190], 次いでその下方に「クルト Kurt[57]」[191] がある。「ラバト Ribāṭ<Barbāṭ［*sic*］>[58]」[192] の地点では, 海沿いに或る河口があり, その川沿いに, ラバトと向かい合ってサレ Salah（Salā）<Madālah［*sic*］>」[193] がある。次いで,「メリーリャ」[194],「ハジャナ Ḥajanah(?)」[195],「ダフラ Dakhlah(?)」[196],「フェス Fās」[197], その向かい側に再び「フェス」[197] がある。これらの町の後方の陸地には,「バニー・サダール Banī Sadāl(?)」[198],「ハバシュ al-Ḥabash(?)」[199],「バニー・ラジーク Banī Rajīk(?)」[200] がある。また, サレの左側で, 陸地の一画が海に突き出ており, そこには「ここは環海への狭い土地であり, それはバルガワータ Barghawāṭah の国（balad）と彼らの居住地との領域である」[201] が読める。この狭い土地の下方に, 或る河口があり, この川と海岸との間には, 町々のうち,「ラバト・マーッサ Ribāṭ Māssah[59]」[202] と「タームドゥルト Tāmadalt（Tāmdult）< Madalt［*sic*］>)」[203] がある。そして, その川沿いに「アグマート Aghmāt」[204] と「スース al-Sūs」[205], その川の後ろ, スースの向かいに「アウダグスト Awdaghust[60]」[206] があり, 次いで, その上方に,「スィジルマーサ Sijilmāsah」[207] が別の川の湾曲部にある。フェスから一本の道が海沿いにテネスまで通じ, その道沿いには, 町々のうち, フェス川に沿う「ヌマーラタ Numālatah」[208] と「カラーナタ Karānaṭah」[209],「クルマータ Kurmāṭah」[210],「マザーウィルー Mazāwarwā（Mazāwirū）[61]」[211],「ターバリーダー Tābarīdā」[212],「サーア Ṣā'」[213],「ジュラーワ Jurāwah[62]」[214],「トレムセン Tilimsān<Tinimsān［*sic*］>」[215],「タルファーナ Ṭarfānah」[216],「アフカーン / フ

51 Arzakūl：M p. 56, Arshaqūl：B pp. 747, 748, 749 ほか, Jazīlrat Arshaqūl：Id p. 534, Arjakūk：Yt Ip. 144

52 Nakūr（Nukūr）：Yb p. 357；M pp. 56, 220；B pp. 754, 763, 766 ほか, Nākūr：Iṣ pp. 34, 37,

53 Azīlah：Iṣ pp. 34, 35, 37；M p. 247, Azīlā：M pp. 57, 220, Aṣīlā：B p. 762, Aṣīlah：B pp. 780, 789, 790 ほか, Azīlā / Aṣīlā：Id p. 530, Azīlay：Yt Ip. 170

54 al-Ḥajar/Ḥajar al-Nasr：B p. 793, Ḥajar al-Nasr：B pp. 811, 813, 817, al-Ḥajar：Id p. 531

55 Tāwarart：B pp. 763, 811, Tāwarah：Id pp. 244－5

56 本文 IḤ p. 81 で Aryagh, Buḥayrat Aryagh: Yt I p. 351

57 Qurt : Id p. 531

58 Yt Ip. 368 は Barbāṭ を使っているが, 次章で説明するように, 本文 IḤ p. 81 に, サレ Salah の ribāṭ という語が登場する。

59 本文 IḤ p. 61 では Māssah。Māssah：Yb p. 360；M pp. 57, 221

60 Ghusṭ：Yb p. 360

61 Marāwiz：Id p. 247

62 Jurāwah Ibn Qays：Id pp. 247, 248

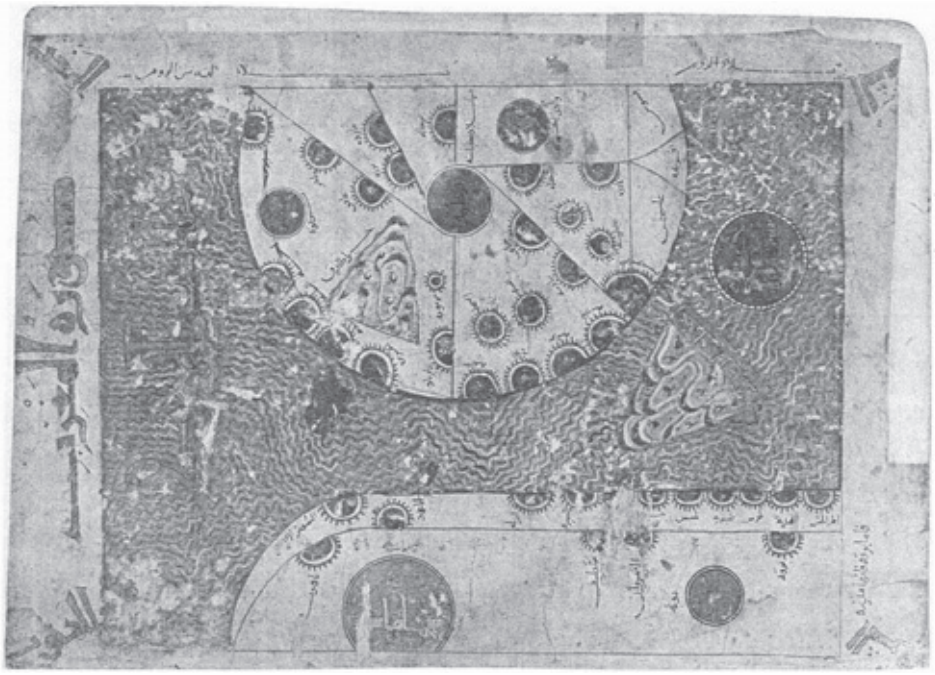
ァッカーン Afkān/Fakkān[63]」[217]がある。そして，この川の対岸に再びアフカーン［217］，次いで，「ヤラル Yalal<Balal[*sic*]>」［218］，「シェリフ Shalif」［219］，「グッザ Ghuzzah」［220］，「タージャンナー Tājannā」［221］がある。テネスの下方，地図の端には，「ハドラー al-Khaḍrā」［222］がある。それは下方から来る川に沿っている。この川の始まりには「ターヘルト / ティアレト Tāhart」［223］，その下方の陸地には「サーマ Sāmah」［224］，次いで，その下方，地図の端には「ガーナ Ghānah」［225］がある。この端に平行して，「ここは黒人諸国（mamālik）の諸地域である」［138］と書かれている。この文言の終わりは，マグリブ図の第 2 部分にあり，すでに説明したとおりである。海には「マヨルカ Mayurqah」［226］と「フラール（あるいはキラール）al-Fulāl/al-Qilāl 山[64]」［227］との両島が形を与えられている。

上方の陸地に関しては，その右部分の海のところに，「バスク Bashkūnis（Baskūnas）[65]」［228］，「フランク Ifranjah」［229］，「ローマ Rūmiyah」［230］，「ガリジャシュカシュ（あるいはアルジャスカス）Ghalijashkash<Ghalijashkas[*sic*]>/‘Aljaskas）地方（bilād）[66]」［231］が読まれる。その左，海岸沿いには，「アルシラ al-Jazīrah」［232］，「バレンシア Balansiyah」［233］（地方），「カルタヘナ Qarṭājannah」［234］，「アルメリア al-Marīyah」［235］，「アルヘシラス al-Jazīrah（al-Jazīrat al-Khaḍrā’）[67]」［236］があり，これらの町の後ろの陸地には，「トルトサ Ṭurṭūshah」［237］，「ムルシア Mursiyah」［238］，「トゥドミール Tudmīr 地方（kūrah）」［239］，「マディーナ・アッ＝トゥラーブ Madīnat al-Turāb」［240］，「ペチナ Bajjānah」［241］，「マラガ Mālaqah」［242］，「グアディクス Wādiyāsh」［243］があり，また，「ハエン Jayyān」［244］が或る川の湾曲部にある。この川の後ろに別の川が描かれ，そこには「これはコルドバ Qurṭubah 川で，セビーリャ Ishbīliyah を通って，タンジールの地のマルサ・ムーサーの向かい側で，西の海に流れ込む」［245］が読まれる。「コルドバ」［246］の町はその川の向かい側の湾曲部にある。この二つの川の間には，町々のうち，右から「トゥデラ Tuṭīlah」［247］，「サラゴサ Saraquṣah（Saraquṣṭah）[68]」［248］，「ウエスカ Washqah」［249］があり，また，「ハティバ Shāṭibah」［250］と「エルビラ Libīrah（Ilbīrah）[69]」［251］とが第 1 の川沿いにある。次いで，その左には，「エシハ Istijah」［252］，「タークルンナー Tākurunnah（Tākurunnā）< Thākurunnah [*sic*] >」［253］（地方），「カッリブ Qallib（?）」［254］，「カルセナ Qalsānah（Qalshānah）[70]」［255］，「ヘレス Sharīsh」［256］，「カルモナ Qarmūnah」［257］，「ムラード Murād」［258］，「ガルギー

63 Fakkān：M pp. 219, 247；B p. 749，Afkān：Id p. 250；Yt Ip. 232
64 Jabal al-Qilāl：Iṣ p. 51
65 Baskūnas：Iṣ pp. 33, 35, 36
66 ‘Aljaskas：Iṣ pp. 33, 35, 36
67 al-Jazīrah：Yb p. 354；M p. 57；B pp. 893, 895, 905，al-Jazīrat al-Khaḍrā’：M p. 235；B p. 813；Id p. 570
68 Saraquṣṭah：Yb p. 355；Iṣ p. 35，Saraqusṭah：Iṣ pp. 36, 38；M p. 57，Saraqūsah：M p. 235
69 Ilbīrah：Yb p. 354；Iṣ p. 35
70 Qalshānah：Id p. 816

ラ Gharghīrah」[259] があり，コルドバ川の終わりと海との間には「オクソノバ Ukhshunubah 地方（iqlīm）」[260] が読まれ，そこには，町々のうち，海沿いに「レペ Lab」[261]，「シルヴェス Shilb」[262]，「アルカセル・ド・サル Qaṣr Banī Wardāsan<Wadāsan[*sic*]>(al-Qaṣr)[71]」[263] があり，その後ろの陸地には，「ニエブラ Lablah」[264]，「ヒブラレオン Jabal al-'Uyūn」[265]，「オクソノバ」[266] があり，次いで，「セビーリャ <Sabtah[*sic*]>」[267] が川沿いにある。地図の上方には，海に注ぐ三つ目の川があり，そこに「この川（wādī）は，それに沿ってムスリムたちの町々，諸地方（a'māl），諸地区（rasātīq）があり，タホ川 Wādī Tājū<Bājah[*sic*]> で知られる。ガリシアには，この川沿いに二つ以上の町があり，川はガリシアの大部分を貫き，アンダルス al-Andalus の地のアルマダ al-Ma'dan とリスボン Lishbūnah との間で環海に流れ込む」[268] が読まれる。この川の河口には「アルマダ」[269] の町がある。この川とコルドバ川との間には，町々のうち，「トレド Ṭulayṭulah」[270]，「タラベラ Ṭalabīrah」[271]，「マハーダ・アル＝バラート Makhāḍat al-Balāṭ」[272]，「ミクナーサ Miknāsah<S.k.tān[*sic*][72]>」[273]，「カセレス Qaṣrāsh」[274]，「トルヒーリョ Turjīlah（Turjālah）[73]」[275]，「メデリン Madallīn」[276]，「メリダ Māridah」[277]，「アルカンタラ Qanṭarat al-Sayf」[278]，「バダホス Baṭalyaws」[279] がある。次いで，その下方には「マラゴン Malaqūn」[280]，「カラトラバ Qal'at Rabāḥ」[281]，「カラクエル Karkuwīyah」[282] がある。タホ川と地図の端との間には，海沿いに「リスボン」[283]，「シントラ Shantarah」[284]，その後ろの陸地には，「サンタレン Shantarīn」[285]，「アビス Bīzah<Ba'zah[*sic*]>」[286]，「ジュロメーニャ Jull Māniyah」[287]，「エルヴァス Ilbash」[288] がある。地図の右部分には「ルーナ（あるいはユーナ）Lūnah/Yūnah（?）」[289]，「サモラ Sammūrah」[290]，「レオン Liyūn」[291] がある。」

71　al-Qaṣr：Id pp. 544, 547
72　Miknāsah：Id p. 551 に従う。
73　Turjālah：M p. 57；Id p. 550



イスタフリーのマグリブ図

イブン・ハウカルのルーム海の図

Ⅳ）図中のマグリブについて

彼が狭義のマグリブ（エジプトを除く北アフリカ）を訪れたのは，336AH/947年から360AH /971年にかけての複数回と考えられる[74]。当時，マグリブ東部と中部はファーティマ朝，あるいはベルベル人サンハージャ族のズィーリー朝などファーティマ朝の宗主権を認める勢力が実効支配していた[75]。ところが，マグリブ西部はファーティマ朝が，後ウマイヤ朝，イドリース朝，ベルベル人のザナータ族やマスムーダ族，ミクナーサ族などと支配を争っている状況にあった[76]。

この地図では，半円形に突出したキレナイカや，ガーベス湾から北上した後に西行する狭義のイフリーキヤ Ifrīqiyah（現チュニジア）の海岸線など，北アフリカ東部沿岸部はその特徴を描出して，現実味を帯びた図形となっている。キレナイカには，バルカ山［4］，すなわち現アフダル山地 al-Jabal al-Akhḍar の記載がある。通常，山は墨色で塗られているのだが，ここではそうした表示がない。また，その手前にあるマラーキヤ［7］はおそらく，イスラームの北アフリカ進出以前にエジプトの西隣に当たったマリマルカ地方をアラビア語で不正確に綴ったものであろう[77]。

地中海南岸には，東はアレクサンドリア［5］から，バルカ（現マルジュ al-Marj）［3］，トリポリ［65］，ガーベス［66］，そしてスファックス［67］以西は，大西洋岸のアスィーラ［183］までチュニス［71］，アルジェ［76］，オラン［175］，タンジール［181］など22の港市が並んでいる。これらの港市の記入は当時，地中海南岸部と，イスラーム圏・非イスラーム圏を問わず他の地中海沿岸部との海上交易が盛んであった事実を反映するものであろう。チュニス以西の海岸線は，以東の海岸線と異なり，単なる直線で描かれている。この直線はイスタフリーによるマグリブ図やイブン・ハウカル自身のルーム海の図では，マグリブの全海岸線に使われており，バルヒー学派の模式的な地図の典型的な表示法と言える。また，アレクサンドリアからガーベスまでと，チュニスから大西洋岸までは，実際はほぼ同じ距離であるのだが，この地図ではチュニス以西の方が長めに描かれている。この描出には，イフリーキヤ以西の方が海岸線が長いという製作者の距離感ないし心理や，重要なものは詳しくあるいは過大になるという傾向が働いているのかも知れない。あるい

74　イブン・ハウカルは地理書の本文［IḤ］（以下，本文と略記）中で，彼が336AH/947－8年にマフディーヤ［pp. 71, 96］，340AH/951－2年にスィジルマーサ［pp. 83, 89］とアウダグスト［pp. 61, 99］と訪れたと言っているほか，360AH/971－1年にもマグリブ Maghrib［p. 97］にいたと考えられる。cf. Garcin［1983, p. 83］

75　本文中で，例えば，オランはマグリブの主（ファーティマ朝カリフ）の代理者ユースフ・ブン・ズィーリー Yūsuf b. Zīrī（ズィーリー朝初代君主，在位361－73AH/972－84年）の手中にある［p. 78］と言っている。

76　本文中で，例えば，セウタとマルサ・ムーサーはウマイヤ朝 Banū Umayyah に属する［p. 79］とか，クルトやハジャルはイドリース家 Āl Idrīs に属する［p. 81］と言っている。また，後述するように，サレ以南の大西洋沿岸地帯はマスムーダ族のバルガワータ族の国，スィジルマーサはミクナーサ族のミドラール朝が支配していた。

77　IKh p. 91 や Yb p. 339 では，マグリブの始まり（東端），あるいはアレクサンドリア地方の最西部として，リビア Lūbiyah と対で登場する。また，Id p. 11 では，やはりリビアと対になって，バルカの地とアレクサンドリアの地との間に置かれ位置し，Yt V, p. 94 では，アレクサンドリアからイフリーキヤへ向かう時に出会う最初の地域（balad）で，その後がリビヤとなっている。

は単に，イフリーキヤ以西は海岸に都市が多いため，それらを記入していき自ずと長くなってしまったという結果なのかも知れない。

セウタ［180］とタンジール［181］との間に，マルサ・ムーサー［182］（アラビア語で「ムーサーの港あるいは係留地」の意）が山に取り囲まれた大きな入り江として描かれている。ここはムーサー・ブン・ヌサイル Mūsā b. Nuṣayr（19－98AH/640－717 年）がイベリア半島へ出発したとされている地点で，セウタの西に位置し，ジブラルタルの岩山と対峙するジュベル・ムーサ Jabal Mūsā「ムーサー山」の麓にある係留地である。イブン・ハウカルの時代には，マグリブで最も有名な「港」（実際は係留地）の一つであった[78]。海岸線はアスィーラ［183］の西で南へ向かうように描かれているが，実際には，タンジールから先で南へ向かう。やがて，入り江状のアルヤグ湖（塩湖）［190］が登場する。この塩湖は，大西洋岸にある現在のメルジャ・ゼルガ al-Marjah al-Zarqā' である。

マグリブ極西部にはバルガワータ族の地［201］が海に向かって突き出たほぼ円形の地として描かれている。バルガワータ（あるいはバルグワータ）族は，マスムーダ系ベルベル人で，当時，大西洋＜イブン・ハウカルの「環海」＞の沿岸地帯＜イブン・ハウカルの「狭い（あるいは細長い）土地」＞（現モロッコ中部の，サレからサフィー Āsfī にかけてと言われる[79]）に住み，８世紀中葉以来，イスラームを離脱した彼らの預言者サーリフ・ブン・タリーフ Ṣāliḥ b. Ṭarīf（178AH/794－5 年以後没）の宗教を奉じ[80]，独立勢力をなしていた。このバルガワータ族の地の上方の河口にサレ［193］とラバト［192］という地名が見える。この川はブー・レグレグ Abū Raghrīgh 川と考えられ，サレとラバトは実際とは逆の位置に記されている。イブン・ハウカルの地理書の本文（以下，単に本文と略記）中に，「サレ Salah には，ムスリムたちが見張る砦（ribāṭ，ラバト）がある。・・・彼らの砦（ラバト）はベルベル人の部族バルガワータに対するもの」[81] という記述があり，ここに登場するラバトすなわち砦は，10 世紀頃に，サレの町の対岸に，異端の徒であるバルガワータ族の地に対してイスラームを防衛するために設けられたものであった。そして，この砦とその周辺が後代に発展して，ラバトの町（現モロッコの首都）となっていくのである。

次に内陸部に目を転じると，エジプトのフスタート［46］あるいはギーザ［47］から，トリポリタニアのアジュダービヤ［2］や，ジャバル・ナフーサ［83］などを通り，イフリーキヤの中心地カイラワーン［97］までの宿駅地（あるいは休憩地点）［8］が記入されている[82]。名前にワジあるいは川を意味するワーディーや，深い井戸を意味するジュッブ，

78　本文中で，マルサ・ムーサーがベルベル人の諸地域で最も大きな港の一つとみなしている［p. 78］。また，前記の地図説明のコルドバ川の文言も参照。

79　El Fasi［1988, p. 65］; Abun-Nasr［1987, p. 52］

80　本文中では，この人物は Ṣāliḥ b. 'Abd Allāh と記され［p. 82］，彼らは自分たちのコーラン（すなわち，ベルベル語の聖典）を持つと述べられている［pp. 82－3］。

81　IḤ pp. 81－2

82　この地図に宿駅地［8］と書かれたのは，［14］から［45］までと，［81］と［82］，［86］から［96］までの，それぞれを指すためである。また，同様に［6］は［11］から［13］を指す。

井戸を意味するビール（複数アーバール）が付いている地点が幾つかあり，基本的に隊商の給水地点であったことを示す。前述の港市の詳しい記載とあわせて，この地図の主要な使用目的の一つが商業用であったことを窺わせる。この隊商路の途中にあるジャバル・ナフーサ（ナフーサ山地）には東部にシャルース［84］，西部にジャード［85］という交易都市が記されている。実際は，当時のこの山地の中心都市ジャードはフェッザーンのザウィーラ Zawīlah へ，他方シャルースはガダーメス Ghadāmis へと道が通じており，位置的に逆である。また，地図には「ジャバル・ナフーサ，その住民は異端の徒である」［83］との文言があるが，本文中では詳しく，住民はアブドゥッラー・ブン・イバード ʻAbd Allāh b. Ibāḍ（86 A.H./705 年頃没）に従う者たち（すなわち，ハワーリジュ派のイバード派）かアブドゥッラー・ブン・ワフブ ʻAbd Allāh b. Wahb（38 A.H./658 年没）に従う者たち（すなわち，ハワーリジュ派の最初の指導者，アブドゥッラー・ブン・ワフブ・アッ＝ラースィビー al-Rāsibī の支持者たち）であると述べられている[83]。

マグリブの主都でもあったカイラワーン［97］からは，前述したフスタート・カイラワーン間の休憩地点あるいは宿駅地のみの表示と異なり，かつてのイドリース朝の首都でマグリブ西部の中心都市フェス［197］にまで通じる街道とその沿道上の都市が描かれている。すなわち，カイラワーンからは西方へ向かって 2 本の街道が走り，北の道は，ウルブス / ロルブス［116］を通ってスィーグス［119］へ，さらにコンスタンティーヌ［120］，ミーラ［121］，そこからはセティーフ［124］を通る道と，マッガラ［122］とムスィーラ［123］へ通じる道とに分かれる。他方，カイラワーンからの南道は，スビーバ［114］を通ってアウレス山地の入口バーガーイ［115］へ，さらにトブナ［128］を経てマッガラとムスィーラへと通じる。ムスィーラから，一方の道は，ズィーリー朝の本拠地アシール（現アイン・ブーシフ ʻAyn Būsayf）［134］を過ぎると，セティーフを通る別道とも合流して，ミリアーナ［136］を経て，テネス［174］に至る。ムスィーラからのもう一方の道は，かつてのルスタム朝の首都ターヘルト / ティアレト［223］を通る。そして両道は，アフカーン / ファッカーン［217］で合流した後，トレムセン［215］などを通り，フェスに達する。カイラワーンからの南道の途中には，アウレス山［110］が描かれているが，この山地は南方のサハラや黒人地域と狭義のマグレブとを分かつ境界であったことがこの地図からも読み取れる。こうしたカイラワーン・フェス間の街道と都市の描出は，フスタート・カイラワーン間の休憩地点の記入の場合と同様の経済的目的を知らしめるほか，ファーティマ朝の政治・軍事的目的にも資する地図であることを窺わせる。

フェス［197］より南方，同じく内陸部にスィジルマーサ［207］が描かれている。この都市はアトラス山脈の南側に位置し，イブン・ハウカルが訪れた当時（951－2 年）は，ベルベル人ミクナーサ族のミドラール朝の首都であった[84]。その南方には，彼がやはり訪

83　IḤ p. 96。また，本文中では，ジャバル・ナフーサの住民だけでなく，カスティーリヤ［106］，ガフサ［102］，ネフタ［107］，ハンマ［103］，スィマータ［105］，ベシュリ Bishsharā もイバード派かワフブ派と述べている［p. 96］。

84　本文中で，住民は異端の徒と言う［p. 91］とおり，当地の住民はハワーリジュ派のスフリー派に

れたアウダグスト［206］が描かれ，その東，地図の最下部には，黒人地域のガーナ［225］，カーネム［140］，ザガーワ［141］，ガオ［142］も示されている。地図上では線が引かれていないが，本文ではスィジルマーサ以降，これらは道になってつながっている[85]。実は，この道はファーティマ朝が，さらには後ウマイヤ朝も特別な関心を払った，黄金交易の道であった。マグリブ西部地域におけるファーティマ朝の政策は常に，黒アフリカの黄金のルートの安全確保に主眼が置かれていたと考えられる。イブン・ハウカルは本文で，このガオが最終的にはトリポリタニアのアジュダービヤ［2］ともつながっているとも記している[86]。

そのほか，この地図にはマグリブ地方の河川も，海に注ぐもの６つ（支流を入れると９つ），内陸のもの１つが描出されている。しかし，地図上ではいずれも名称が明記されておらず，しかも川筋が不正確というか不明瞭であり，実際は異なる複数の川があたかも一つの川の上・中・下流に当たるかのように描かれている。これはあるいは，河川を街道のように見立て，川岸の諸都市を結んだ結果なのだろうか。ともかくも，これらの河川を少し検討してみよう。地図の説明に名が登場するのは，バルガワータの地［201］の上（北側）に河口を持つ川の中流部分に当たるフェス川のみであるが，本文中には幾つか川の名前が挙がっている。そのうち，セヘル Sihar 川（現クソブ al-Kasub 川）が地図の右（東）から数えて１番目の川の上流部＜地図では沿岸にムスィーラ［123］がある＞，ミルフ al-Māliḥ 川がその中・下流部？＜地図説明文中の「シェルシェール［78］で海に注ぐ」は誤り＞，シェリフ Shalif 川が２番目の川（上流部のターヘルト / ティアレト［223］を流れるティアレト川はシェリフ川の支流の一つである），タフナ Tāfanā 川が３番目の川の河口部＜アルジャクーク［177］がある＞，モローヤ Malwiyah/Mulūyah 川が３番目の川の西上流部＜ターバリーダー［212］がある＞，ムスーン Masūn 川が４番目の川の上流部，セブー Sabuh（Sabū）川＜イブン・ハウカルはフェス川と同じ川とする＞がバルガワータの地の北側の川の中流部，サレ川（ブー・レグレグ）がその河口部＜サレがある＞，と推定される[87]。残りの，バルガワータの地の南側の川は，本文中にも名前が登場しないが，アグマート［204］やスース［205］が沿岸にあるので，テンスィフト Tinsift 川やヌフィッス Niffīs 川かも知れない。また，スィジルマーサがその湾曲部にある川は，ズィーズ Zīz 川と考えられる。なお，この地図では，アフカーン / ファッカーン（現アイン・フェカン ‘Ayn Fakan）［217］とフェス［197］は，それぞれ川の両岸に跨るということで２回登場する。

最後に，説明を要する地名に少し触れておく。

属していた。

85 IḤ p. 92

86 ibid.

87 セヘル川は IḤ p. 85，ミルフ川は pp. 88, p. 90，シェリフ川は p. 90，タフナ川は p. 78，モローヤ川は pp. 88－9，ムスーン川は p. 88，セブー川すなわちフェス川は pp. 81, 88，サレ川は p. 81。なお，本文中に名前が挙がっているのに，地図には描かれていない川として，サフダド Safdad 川（現ルッコス Lukkus 川）［p. 79］などがある。

１）チュニスの東に記載されているケリビア［70］は，実際は地中海に突き出たアブー・シャリーク半島 Jazīrah Abī Sharīk（現ボン岬 al-Ra's al-Ṭīb 半島）にあり，当時，シチリアへの乗船地として知られていた[88]。

２）現モロッコ南部，マーッサ川の河口付近にあったラバト・マーッサ［202］，あるいは本文中のマーッサは，当時のマグリブあるいはイブン・ハウカルの考えるマグリブの沿岸部の最終地点であった[89]。

３）カスティーリヤ［106］は，一般には現チュニジア南部のジェリード al-Jarīd という名でも知られる地方を指すが，彼は本文でも都市として記し[90]，当該地方の中心都市トズール Tūzar（Tawzar）のことを指している。彼が挙げるハンマ［103］とネフタ［107］もこの地方に属する。

なお，前述のサレとシェルシェールのほかにも，幾つかの都市の位置は誤っている。例えば，ターマドフース（マティフー Matifū 岬）［77］は実際にはマルサ・アッ＝ダジャージュ［75］とアルジェ［76］との間にあるといった具合であるが，こうした誤りは一個人の知識・情報の産物では仕方のないことかも知れない。

以上，これら（アレクサンドリアより西）の地名をあらためて見てみると，現段階で，同定・比定できないものも幾つかあるが，おそらくすべてが実在するあるいは実在したものと考えられる。なかでも，当時の他の地理書や歴史書などにもしばしば登場し，かつ位置が特定できる地名としては，次のようなものがある。

地図の第１部分：スィルト［1］，アジュダービヤ［2］，バルカ（現マルジュ）［3］，バルカ山［4］, ワッダーンのオアシス［9］, アウジラのオアシス［10］, ヤフーディーヤ［18］，マヒール川［26］＜以上，現リビア領＞，ラマーダ［32］，ザート・アル＝フマーム（現ハンマーム al-Ḥammām）［41］＜以上，現エジプト領＞，

第２部分：トリポリ［65］＜現リビア領＞，ガーベス［66］，スファックス［67］，マフディーヤ［68］，スーサ［69］，ケリビア［70］，チュニス［71］，タバルカ［72］＜以上，現チュニジア領＞，マルサ・ル＝ハラズ（現ラ・カール al-Qālah）［73］，ボーヌ（現アンナーバ ‘Annābah）［74］，マルサ・ッ＝ダジャージュ［75］，アルジェ［76］，ターマドフース / マティフー［77］，シェルシェール［78］，ブラシュク［79］＜以上，現アルジェリア領＞, フェッザーン［80］地方, ワーディ・アッ＝ラムル［81］, ジャバル・ナフーサ［83］，シャルース［84］，ジャード［85］，サブラタ［90］＜以上，現リビア領＞，カイラワーン［97］, ガフサ［102］, ハンマ［103］, ナフザーワ［104］, カスティーリヤ（トズール）［106］，ネフタ［107］＜以上，現チュニジア領＞，アウレス山［110］，ビスクラ［111］，タフーザー［112］，バーディス［113］＜以上，現アルジェリア領＞，スビーバ［114］＜現チュ

88 本文中には，「シチリアはイフリーキヤの地のケリビアの向かいにある」と述べられ［p. 60］，Yb p. 348 には「シチリアへの乗船地であるケリビア」という記述がある

89 本文中では，マグリブの境界は北では，バルガワータの地とマーッサを通り，ルーム海の出口に至る［p. 61］とか，南の環海はマーッサとスィジルマーサ西方地域とスース・アクサー al-Sūs al-Aqṣā の外部を通る［p. 61］とある。

90 IḤ p. 94

ニジア領＞，バーガーイ［115］＜現アルジェリア領＞，ウルブス / ロルブス［116］＜現チュニジア領＞，スィーグス［119］，コンスタンティーヌ［120］，ミーラ［121］，マッガラ［122］, ムスィーラ［123］, セティーフ［124］＜以上, 現アルジェリア領＞, オッバ［125］＜現チュニジア領＞, トブナ［128］, ベレズマ［129］, ニガーウス［130］, デッガマ［131］, アシール（現アイン・ブーシフ）［134］，スーク・カラーあるいはスーク・キラーム［135］，ミリアーナ［136］＜以上，現アルジェリア領＞，

第 3 部分：テネス［174］，オラン［175］，ワーサラン［176］，アルジャクーク / アルシャクール（現ラシュグーン Rashqūn）［177］＜以上, 現アルジェリア領＞, メリーリャ［178］＜現スペイン領＞，ナクール（現フセイマ al-Ḥusaymah）［179］＜現モロッコ領＞，セウタ［180］＜現スペイン領＞，タンジール［181］，マルサ・ムーサー［182］，アスィーラ［183］, ハジャル・アン＝ナスル［186］, バスラ［188］, アルヤグ湖［190］, クルト［191］, {ラバト［192］}，サレ［193］，フェス［197］，バルガワータ族の地［201］，ラバト・マーッサ / マーッサ［202］，タームドゥルト（現ワーガ Wāqah）［203］，アグマート［204］，スース［205］地方＜以上，現モロッコ領＞，アウダグスト［206］＜現モーリタニア領＞，スィジルマーサ［207］，ヌマーラタ［208］，クルマータ［210］，ターバリーダー［212］，サーア（現タウリルト Tāwurīrat）［213］，ジュラーワ［214］＜以上，現モロッコ領＞，トレムセン［215］, アフカーン / フェッカーン（現アイン・フェカン）［217］, シェリフ［219］，グッザ［220］，タージャンナ［221］，ターヘルト / ティアレト［223］＜以上，現アルジェリア領＞。

V）図中のイベリア半島について

イブン・ハウカルは 337AH 初 /948 年 7 月にアンダルス，すなわちイベリア半島を訪れている [91]。当地では，ファーティマ朝に対抗してカリフを名乗り，マグリブにも進出し，イベリア半島北部のキリスト教徒地域諸国もほぼ服従させつつあったアブドゥッラフマーン ‘Abd al-Raḥmān 3 世（在位 300－50AH/912－61 年）の下で，後ウマイヤ朝が絶頂期を迎えていた。

この地図では，イベリア半島が半円形に描かれているが，北アフリカの海岸線の長さを基準にすると，イベリア半島中南部はやや大きめに描かれている。とりわけ，グアダルキビル川より南の部分が大きくなっている。

半島の北東，地中海に面する部分には，三角形をなす「フランク」［229］の地と，その上方に「バスク」［228］の地，その両者の間に「ローマ」［230］が描かれている。フランクの地は実際よりもはるかに小さく表現され，バスク地方はフランクの西のつもりなのかも知れないが，実際とは異なる位置に配され，ローマに至っては理解に苦しむ場所に置かれ，ほぼ伝説の地と化している。地図の上方（北方あるいは東方）の無名の山脈から流れ来るやはり無名の川がこれらの地と「ガリジャシュカシュ（あるいはアルジャスカス）地

91　IḤ p. 108

方」［231］を分けている。この山脈はイタリアのアペニン山脈や，アルプス山脈，ピレネー山脈などを念頭に置いたものと推察され，川の方は伝聞に拠ったローヌ川などかも知れない[92]。また，ガリジャシュカシュ（あるいはアルジャスカス）地方と呼ばれていたのは，ハカ al-Jāsqas 地方と考えられる[93]。いずれにしろ，この半島北東部は，伝説（あるいは未知）の地とまではいかないが，半知の地と言えよう[94]。

ハカ地方とフランクとの下方の海上に描かれているフラール（あるいはキラール）山［227］は，イブン・ハウカルの本文の「ルーム海」章中に「フランクの諸地域にあり，ジハードを行う者たち（al-mujāhidūn）の手中にあるフラール山」[95]と記されているが，通説では，マルセーユとニース間の海岸にあるフラクシネトム［Fraxinetum］（現ラ・ガルド・フレネ［La Garde-Freinet］）の山城とされており[96]，海上の島ではない。この要塞は，イベリア半島方面から来たムスリム「モール人」のいわば匪賊の集団が 891 年から 973 年にかけて南フランスとアルプス山中を中心に劫掠活動を行った際の拠点であった。このムスリムの前線基地フラクシネトムの後方の海上にはマヨルカ［226］島が描かれている。当時，後ウマイヤ朝は，マヨルカ島を含むバレアレス諸島も支配下に置き，イスラーム側による西地中海の統制権の掌握の一端を担っていた[97]。また，アルヘシラス［236］の下方の海上に描かれている，無記名で説明もない島状の地は，ジブラルタル Jabal Ṭāriq（「ターリク山」）と推測される[98]。

地図ではハカの地より左（実際は西というより南）と上にあたる後ウマイヤ朝支配地域には，３つの地方，すなわちオクソノバ地方［260］とトゥドミール地方［239］とバレンシア［233］地方，および首都コルドバ［246］をはじめとする 50 あまりの都市，さらにはコルドバを起点とする３本の街道，そして３あるいは４筋の河川が描出され，タホ川［268］，コルドバ川［245］には，それぞれ説明文が付されている。

まず，街道をもう少し詳しく見ていくと，第１の街道はコルドバ［246］から南西（あるいは南）へ，ムラード［258］やカルモナ［257］を通ってセビーリャ［267］へ至る。この道は本文によれば，さらにその先，ニエブラ［264］，オクソノバ（ファロ）［266］，シルヴェス［262］，アルマダ［269］，シントラ［284］，サンタレン［285］，エルヴァス［288］，

---

92 Miquel［1975, p. 354］はこの山脈をアルプスとピレネー，Beckingham［1971, p. 75］はこの川をローヌ川と考える。

93 アルジャシュカシュ（アルジャスカス）という読み方からは，ʻilj（非アラブ人，異教徒）＋Shakash（あるいは Jāqah）（ハカ）で，「ハカの異邦人（異教徒）」の意だとする説［Hadj-Sadok, 1949, p. 113］がある。なお，ハカは，Yb p. 355 には，al-Jāsqas（あるいは al-Jāqiyyah）という表記で登場する。ただし，イブン・ハウカル自身は，ガリジャシュカシュをランゴバルド al-Ankaburdhah の人々としている［p. 62］。

94 ムスリムが考えるこの伝説・半知の地については，Miquel［1975, pp. 349－59］を参照。

95 IḤ p. 204

96 通説は Miquel［1975, pp. 378－80］。フラクシネトムについては，Lévi-Provençal［1950－53］，ii, pp. 154－60］を参照。なお，以下，［　］付きのローマ字表記はアラビア語以外を指す。

97 本文の「ルーム海」章中に「マヨルカはアンダルスの主たちにとって重要な島である」［p. 204］とある。

98 本文中にジブラルタル島（半島）Jazīrat Jabal Ṭāriq［p. 62］が登場する。

バダホス［279］，メリダ［277］，トルヒーリョ［275］などをつなぎ，トレド［270］へと通じる[99]。すなわち，地図上でタホ川の下側に並んでいる諸都市が，道路網で結ばれているのである。また，第２の街道も南西（あるいは南）方向へ向かい，エシハ［252］やカルセナ［255］を経てヘレス［256］へ伸び，第３の道は南（あるいは南東）へと向かい，エルビラ［251］を通ってペチナ［241］に至り，そこから北上（あるいは北西行）してグァディックス［243］に通じるように描かれている。本文では，第３の道が簡単に言及されているに過ぎないが，これらの記載は首都コルドバを起点とした，当時のアンダルスの道路網の一端を明らかにする。なお，彼に先行するイスタフリーの地図では，コルドバを中心に６本の街道が直線で引かれている[100]。

次に，川を見てみよう。南東部を流れる「第１の川」は，ハティバ［250］，ハエン［244］，エルビラ［251］を通り，２流に分かれ，その一つがアルヘシラス［236］で地中海に注ぐように描かれている。これは現実とは異なっており，強いて言えば，上流部がフカル川，中流部がヘニル川，下流部の左流がグアダレテ川，下流部の右流がバルバテ川を念頭に置いたものなのかも知れない。「第１の川」の上方にあるコルドバ川［245］はグアダルキビル川であり，コルドバ［246］，セビーリャ［267］，ヘレス［256］が沿岸に描かれているが，セビーリャは実際には東岸にあり，ヘレスはこの川沿いにない。そして，コルドバ川の上方を流れるタホ川［268］の下側に並んだ都市のうち，タラベラ［271］とトレド［270］は実際は川の北岸にある。また，タホ川に付された説明文には，この川がガリシアの大部分を貫くとあるが，現実にガリシアを流れるのは，ミニョ川，ドゥエロ川であり，サモラ［290］はそのドゥエロ川に面している。なお，グアダルキビル川とタホ川の間を流れる大河で，メリダ［277］やバダホス［279］を沿岸に持つグアディアナ川が描かれていない。

この地図に描出された都市，地方のうち，次のようなものは，名前も位置もよく知られている。

バレンシア［233］地方，カルタヘナ［234］，アルメリア［235］，アルヘシラス［236］，トルトサ［237］，ムルシア［238］，ペチナ［241］，マラガ［242］，グアディクス［243］，ハエン［244］，コルドバ［246］，トゥデラ［247］，サラゴサ［248］，ウエスカ［249］，ハティバ［250］，エルビラ［251］，エシハ［252］，カルセナ［255］，ヘレス（ヘレス･デ･ラ･フロンテラ）［256］，カルモナ［257］＜以上，現スペイン領＞，オクソノバ地方［260］＜現ポルトガルおよびスペイン領＞，レペ［261］＜現スペイン領＞，シルヴェス［262］，アルカセル・ド・サル［263］＜以上，現ポルトガル領＞，ニエブラ［264］，ヒブラレオン［265］＜以上，現スペイン領＞，オクソノバ（ファロ）［266］＜現ポルトガル領＞，セビーリャ［267］＜現スペイン領＞，アルマダ［269］＜現ポルトガル領＞，トレド［270］，タラベラ［271］，カセレス［274］，トルヒーリョ［275］，メデリン［276］，メリダ［277］，アルカンタラ［278］，バダホス［279］，マラゴン［280］，カラトラバ［281］，カラクエル

99　IḤ pp. 115－6
100　トルトサに至る街道やメリダを通る街道ほかである。

［282］＜以上，現スペイン領＞，リスボン［283］，シントラ［284］，サンタレン［285］，アビス［286］，ジュロメーニャ［287］，エルヴァス［288］＜以上，現ポルトガル領＞，サモラ［290］，レオン［291］＜以上，現スペイン領＞である。

幾つかの場所は位置が正しくない。河川との位置関係では先ほど触れたもののほかにも誤解が見られるが，それらは不問にしても，例えば，マラガ［242］は，実際は海岸部にあるし，トゥデラ［247］，サラゴサ［248］，ウエスカ［249］といった当時の上辺境部（al-Thaghr al-A'lā）の都市は，実際にはトレド［270］ほかの中辺境部（al-Thaghr al-Awsaṭ）の北東にある。

最後に，この地図で注意を要する地名に触れておく。

まず，ムスリムたちが名付けた，トゥドミール地方［239］とタークルンナー（ターコロンナ）［253］地方である。ムーサー・ブン・ヌサイルの息子でアンダルス総督代理のアブドゥルアズィーズ 'Abd al-'Azīz b. Mūsā b. Nuṣayr（97AH/715年没）は95AH/713年，ムルシア地方のオリウエラ Awriyūlah に本拠を置く西ゴート領主テオドミル［Theodomir］と和約（ṣulḥ）を結び，ムスリム支配の下でキリスト教徒とユダヤ教徒の信仰の自由を保証するかわりに，貢納を約束させた。それ以後，ムスリムたちはこの保護国を「テオドミル（アラビア語でトゥドミール）地方」と呼んだのであった。後ウマイヤ朝期，主都はムルシア［238］で，アリカンテ Laqant，カルタヘナ［234］などの都市も有していた。後者のタークルンナー（ターコロンナ）地方は，イベリア半島南部のレイヨ地方の北の山岳地帯で，現在「ロンダ山岳地帯」［Serrania de Ronda］の名で呼ばれる。この地方にはベルベル人が多く入植し，タークルンナーという名も，ベルベル語から来たと言われている[101]。後ウマイヤ朝期，主都はロンダ Rundah であった。

バレンシア［233］は地方名として使われ，都市としてのバレンシアは，アラビア語で「陸の町（あるいは城砦）」を意味するマディーナ・アッ＝トゥラーブ［240］と呼ばれている。これはムスリムがその南方，シュクル Shuqr 川（フカル川）の左岸に建設した，アラビア語で「島の町」を意味するマディーナ・アル＝ジャズィーラ Madīnat al-Jazīrah[102]＜イブン・ハウカルのこの地図では，アル＝ジャズィーラ（アルシラ［232］）＞に対する名として使われるようになったと推測される。

オクソノバは地方名［260］と都市名［266］との両方に使われているが，オクソノバという都市は，ファロのことを指すと考えられる。

そのほか，ミクナーサ［273］やムラード［258］は本来ベルベル系の部族名であり，これらの部族が入植したヒスン（ḥiṣn 城砦化した町）を指す。ミクナーサは，トルトサの北方，エブロ川がセグレ川などと交わる地点にあるメキネンサを指すことが多いが，イブン・ハウカルが挙げるミクナーサは，カセレスの北方と考えられる[103]。また，ムラードは，

101 Marin［1995, p. 616］

102 より正確には，マディーナ・ジャズィーラ・シュクル Madīnat Jazīrat Shuqr「シュクルの島の町」。Mu'nis［1967（2nd. ed. 1986）, p. 67］も参照。

103 本文中には，カセレスから2日，タラベラへは6日［p. 116］と記されており，Id p. 551には，

コルドバから西にさほど離れていない地点にあったと推測される[104]。

なお，この地図には先行するイスタフリーの地図が載せて当時に実在したアンダルスの都市・地方が一部含まれていない[105]。

Ⅵ）図中のイタリア半島ほかについて

イブン・ハウカルは361AH/972年，当時はファーティマ朝から半独立のイスラーム政権であるカルブ朝の統治下にあったシチリアを訪れ，362AH/973年にはその主都パレルモ Balarm に滞在していた[106]。当時のイタリア半島は，北部はほぼ神聖ローマ帝国領やローマ教皇領であったのに対し，南部はビザンツ帝国領（アプ－リア地方とカラーブリア地方）のほか，３つの旧ランゴバルド系国家（ベネヴェント侯国，カープア侯国，サレルノ侯国）と３つの都市国家（ガエータ公国，ナポリ公国，アマルフィ公国）が併存する状況にあった。

この地図では，イタリア半島のカラーブリア地方［149］がＵ字形に描かれ，レッジョ［159］，コセンツァ［161］など計14もの都市が一様に海岸部に記されている。カラーブリア地方の描出は実際よりかなり大きめであり，また，カッサーノ［150］をはじめ，ほとんどの都市が実際には海に面していない。なお，無名の都市一つを除く13の都市は，彼の「ルーム海の図」にも同様な位置で，登場する。カラーブリア地方の北方は，半島の西岸部がほぼ真西方向に延びている。そこには山脈を背にしたアマルフィ［165］，ピサ［168］といった港市など６都市が記されている。この山脈は前でも触れたが，主にアペニン山脈と考えられる。また，内陸部に描かれたサレルノ［164］は実際は海岸部にある。さらには，なぜかジェノヴァ［148］が海上の島として描かれている。なお，この７都市は，彼の「ルーム海の図」には全く描かれておらず，シチリアに近いカラーブリア地方の諸都市よりも彼の関心度が低いことを窺わせる。また，山脈の東側にはスガナ渓谷［173］が示されているが，これはカラーブリア地方の境界に当たるシンニ川だという見解もある[107]。

半島の東岸部はブトリント［170］（実はオトラント［171］）まで東南東方向に，その後ヴェネツィア湾［172］まで北北西方向に，それぞれ直線で描かれている。カラーブリア地方以北の西岸部と，オトラント以北の東岸部は，かなり短く描かれている。アドリア海

タラベラまで４日とあり，Yt Vp. 181には，メリダ地方のヒスンとある。そのほか，同一のあるいは別のミクナーサが，Iṣ p. 38と M p. 247では，コルドバから４日行程にあると記されている。なお，Id pp. 555, 733には，メキネンサも載っている。

104 本文中には，コルドバから１駅［p. 115］とある。Mu'nis［1967（2nd. ed. 1986), p. 478］も参照。そのほか，マハーダ・アル＝バラート［272］もアラビア語による地名であり，本文中には，マハーダ・アル＝バラートは，タラベラまで５日，カセレスから３日［p. 116］と記されており，Id p. 550には，アルカンタラから４日，タラベラまで２日とあるが，まだ比定・同定には至っていない。

105 具体的には，メディナ・シドニア Sadūnah，アリカンテ Laqant，ナフザ Nafzah，レリダ Lāridah，グアダラハラ Wādī al-Ḥijārah，コリア Qūriyah，ベージャ Bājah，ベラルカサル Ghāfiq，モロン・デ・ラ・フロンテラ Mawrūr，レイヨ Rayyah（地方）である。

106 本文中に，361AH/972－73年にシチリアを訪れ［p. 26］，362AH年７月/973年４月にはパレルモにいた［p. 128］と書いている。

107 シンニ川説は Beckingham［1971, p. 75］。

の東側の海岸線はやはり直線で表わされているが，その長さは西側の２倍以上になっている。アドリア海の入口オトラント海峡の西側にあるオトラントと東側にある現アルバニア領のブトリントとが，地図では誤って逆の位置に記されている。この両者は，ヴェネツィアの湾と共に，彼の「ルーム海の図」にも記されているが，やはり位置が逆になっている[108]。

カラーブリア地方を中心としたイタリア半島に関するこの描出はシチリア島で得た知識を基にしたものなのかも知れないが，地図に示されたイタリア半島両岸の港市･都市群は，イタリアとイスラーム世界との地中海交易がイタリア人の手で行われるようになっていき，ヴェネツィアやアマルフィがファーティマ朝などと活発に交易を行ったという歴史的事実を反映する[109]。

なお，あるべき場所にないローマについて，本文の記述を補足すると，ルーム海の章には，「私はコンスタンティノープルの地，ペロポネソス地方，ヴェネツィア湾，カラーブリアとランゴバルド al-Ankaburdhah の地，フランク，ローマ，ガリシア Jalīqiyah，アンダルスの辺境地方といった，その入江（コンスタンティノープルの入江）の後方にある地域の大半を明確にした」という個所と，「それ（コンスタンティノープルの入江）の後ろ，西方には，アテネ Athīnās とローマがある。・・・ローマとアテネはキリスト教徒たちが集う場所を持つ２つの都市で，共に海から近い。・・・ローマはキリスト教徒たちの主教区の一つである。・・・次いで，カラーブリアの地がランゴバルドの地と接し，その最初はサレルノの地である」という個所があり，ローマの位置が両者では異なる。前者は地図と同じであるが，後者は正しい位置になっている[110]。

イタリア半島周辺の海上には，右から，マルタ［143］島，パンテルレリア［144］島，シチリア［145］島，コルシカ［147］島，サルデーニャ［146］島が地名入りで描かれている。形状は問わないとしても，サルデーニャ島，シチリア島など，多くの場合，大きさが過小に描かれている。例えば，シチリア島の場合，形状は三角形となっており適切であるが，大きさが，ほぼ同規模のカラーブリア地方やペロポネソス半島と比べると，かなり小さいくなっている。これらの島のうち，イスラーム側の支配下にあったのは，シチリアに加え，マルタ，パンテルレリア島であったが，サルデーニャとコルシカのキリスト教徒たちは弱小勢力であったため，この海域もほぼムスリムの勢力圏内にあった。

この地図上では，ペロポネソス半島［64］はほぼ円形に描かれ，その上方にはマケドニア地方［63］，そして実際はマケドニア地方の東にあるコンスタンチノープル［62］がその上方にやはりほぼ円形に描かれている。また，バルカン半島と小アジアとの間には，真

108 ヴェネツィア湾には文章による説明が地図に記されているが，ここに登場する Burjān を，Beckingham［1971, p. 76］はブルガール人ではなく，ブルグント Burgund 人と考える

109 補足すれば，ヴェネツィアは造船用の木材，鉄，武器を盛んにファーティマ朝に供給し，971 年，これらの物資をイスラーム地域に運ぶことをビザンツ皇帝によって禁止されるほどであった。

110 前者の引用は IḤ p. 201，後者の引用は IḤ p. 202。そのほか，p. 60 には，ローマとカラーブリアとランゴバルドとフランクとガリシア，という一節がある。なお，「ローマとアテネはキリスト教徒たちが集う場所を持つ２つの都市で，共に海から近い。・・・ローマはキリスト教徒たちの主教区の一つである」という記述は，彼に先行するイスタフリー Iṣ p. 51 に見られる。

っ直ぐ上方に湾入する「コンスタンチノープルの入江」，すなわちダーダネルス海峡・マルマラ海・ボスポラス海峡，黒海が描かれている。

ペロポネソス半島の下方の海上にはクレタ［61］島，シリアとビザンツとの間の辺境地帯スグールの沖にはキプロス［60］島が描かれている。ビザンツ帝国が961年にはクレタ島，963年にはキプロス島を奪還しており，彼がこの地図を描いた当時，東地中海はもはやイスラームの海ではなくなっており，彼は地理書の本文の中で，そのことを嘆いている[111]。他方，西地中海は，前述したとおり，シチリア島やバレアレス諸島がムスリムの手中にあり，依然としてイスラームの海であった。

小アジアに関しては，アンタリア（あるいはアンティオキア）[112]［53］がコンスタンチノープルより大きめの円状の突出として描かれ，その上方には２つの湖，ニカイア湖［54］とニコメディア湖［55］がほぼ円形に近い形で配置されている。前者は現イズニク［Iznik］湖，後者は現イズミト［Izmit］湾と考えられる。さらには，地図の最上部にアナトリコン［56］，ヘラクレイア［57］，サラフワあるいはサルフーフ[113]［58］という３つの地方名の記入，スグールの西側にカラムヤ諸地域[114]［52］という記載が見られる。このうち，ヘラクレイアはカッパドキアかブケラリオンのものと推測できるが，サラフワあるいはサルフーフとカラムヤとは，未だ同定・比定には至っていない。

Ⅶ）おわりに

イブン・ハウカルらバルヒー学派が参考にしたと考えられるササン朝期の地図にはマグリブは存在しなかった。その上，彼に先行するバルヒーとイスタフリーはイラン系のため，マグリブの地理にはあまり通じていなかった。他方，アラブ人であるイブン・ハウカルは，ファーティマ朝のためか否かはさておき，この地域に大きな関心を持ち，自ら歩きまわった。そして，収集した情報に基づいて描いたのがこのマグリブ図であり，結果として，彼が描いた21葉の地図（世界図１葉＋イスラム圏各「州」図２０葉）中，イランの影響の薄い，最も独自性が高いものになった。また，この地図は主にイスラーム圏を扱いながら

---

111 IḤ p. 203「敵はキプロスとクレタのように，それら（ムスリムたちがかつて領有していた島々）を占拠した」。

112 前述したとおり，アンタリア／アッタレイアは，イスタフリー［Iṣ, p. 50］と同様，アンティオキア Anṭākiyah とも読まれる。歴史的シリアの「オロンテス川のアンティオキア」［Antiochia ad Orontem］のほか，キリキア地方（小アジア南部）の海岸部にもアンティオキア［Antiochia Mikra］はあったので，そこの可能性も排除はできない。

113 本文の「ルーム海」章中［p. 192］には，サラフワあるいはサルフーフの地は，ユーフラテス川の上流部第２支流ガイラキト Ghaylaqiṭ 川の水源にあり，カムフ Kamkh などの都市が第１支流クバーキブ Qubāqib 川とこの川との間にある，となっている。

114 同じく「ルーム海」章中［p. 201］には，アクリーミヤ／カラムヤは古くはルーム（ビザンツ帝国）の都市であったが，ムスリムたちが征服したとか，タルソス Ṭarsūs の諸門の一つは，この都市にちなんでアクリーミヤ／カラムヤの門と呼ばれていたとか，海岸から離れたアクリーミヤ／カラムヤを越えて約１日行程で，海岸の村ラムス al-Lāmis にたどり着くといった記述がある。イブン・ハウカルに先行するイスタフリー Iṣ p. 50 にも，カラムヤという地名で，同様な記述が見られる。また，Yt, IV, p. 392 もカラムヤと読み，イブン・ハウカルのこの記述を簡潔に言い直す。他方，IKh p. 117 は，タルソスから16マイルの海岸に，廃墟となったルームの町，カラムヤがあると述べる。

も，非イスラーム圏についてもかなりの記載がある画期的な地図で，彼以外のバルヒー学派―彼の後に登場するムカッダスィー al-Muqaddasī（Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad al-Bashshārī, 380AH/990 年以後没）も含む―の地図では無視されるイタリア半島やペロポネソス半島も描かれている[115]。他方，エジプトとシリアは別個に地図が描かれているので，この両地域は必要最低限の記載を除いてほぼ空白となっている。

彼は商人として各地を巡り歩いたこともあって，この地図を誰かが実際に旅をする際に利用する道案内図として作った可能性がある。そして，エジプト・イフリーキヤ間の宿駅地まで記載するという行き届いた商業用の地図であることは明白であるが，さらには，ファーティマ朝の周辺地域を概観するという政治的な実用性も兼ね備えていたのではなかろうか。その後，このマグリブ図をヤークート Yāqūt（Shihāb al-Dīn Abū ‘Abd Allāh al-Rūmī al-Ḥamawī 626AH/1229 年没）がその大地名辞典『国々の辞典』*Mu‘jam al-buldān* を執筆する際に利用したことはほぼ間違いなく[116]，10 世紀に描かれたこの地図は，少なくとも 13 世紀初頭までは活用されていたことになる。

この地図で何よりも目を引くのは，地図に表わされた都市や地方などの数の多さであり，イスラーム世界と非イスラーム世界をあわせて，計 280 あまりの地名が登場する。しかも，それらはほぼ全てが実在の場所と考えられ，その大半が同定・比定できるものである。歴史的価値の高い地名も数多く含まれている。例えば，シチリアへのクリビア，アンダルスへのマルサ・ムーサーという当時の渡航口や，バルガワータ族の地，異端の徒のジャバル・ナフーサ，フラキシネトムといった当時の特異な場所，マディーナ・アッ＝トラーブ，トドミール，タークロンナーといったイスラームのイベリア半島に特有な地名，さらに非イスラーム圏では，サハラ以南の黄金交易の拠点やイタリアの海洋都市などの当時のムスリムの関心が高かった地点である。川の記述が曖昧であるとか，地中海の島々は位置を示すだけでその他の内容がないといった欠点もある。しかし，イスラーム世界，ビザンツ世界，カトリック世界を描出の対象に入れて環地中海を一体視した地図として，また，10 世紀後半までに環地中海世界を描いた地図の中では最も詳しいものの一つとして，評価されるべき資料である。

［略号］

BGA : Bibliotheca Geographorum Arabicorum, 8vols., Leiden:E.J.Brill, 1870－94［repr. 1967］

EI : The Encyclopaedia of Islam, New Edition, 11vols., Leiden:E.J.Brill, 1960－2002

IGAIW : Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften an der Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main

115 バルヒー学派のルーム海の図に関してである。

116 ヤークートの『国々の辞典』中の，Azīlay（I, p. 170），Barbāṭ（I, p. 368），Qillawriyah（IV, p. 392）の説明には，「イブン・ハウカルが言った」という部分があるが，それらは実際はヤークートがイブン・ハウカルのこのマグリブ図を見て書いたものであろう。

［参考文献］

B：al-Bakrī, Abū 'Ubayd, *Kitāb al-Masālik wa-'l-mamālik*, ed. A.P.Van Leeuwen & A. Ferre, 2vols., Tunis:ad-Dār al-'Arabīyah li-l-Kitāb, 1992

Id：al-Idrīsī, *K. Nuzhat al-mushtāq fī 'khtirāq al-āfāq*, ed. A.Bombaci, *et al*, fascicles Ⅰ－Ⅷ, Naples : Istituto Universitario Orientale di Napoli & Rome : Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1970－82［repr. 2vols., Cairo:Maktabat al-Thaqāfah al-Dīnīyah, n.d.］

IḤ：Ibn Ḥawqal, *Kitāb Ṣūrat al-arḍ*, ed. J. H. Kramers, *BGA*, Ⅱ, 1938［repr. 1967］

IKh：Ibn Khurradādhbih, *Kitāb al-Masālik wa-'l-mamālik*, ed. M. J. de Goeje, *BGA*, Ⅵ,1889［repr. 1967］

Iṣ：al-Iṣṭakhrī, *Kitāb al-Masālik wa-'l-mamālik*, ed. Muḥammad Jābir 'Abd al-'Āl al-Ḥīnī, Cairo:Wizārat al-Thaqāfah wa-'l-Irshād al-Qawmī/Dār al-Qalam, 1381AH/1961

M：al-Muqaddasī, *K. Aḥsan al-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm*, ed. M. J. de Goeje, *BGA*, Ⅲ, 1877［repr. 1967］

Q：Qudāmah b. Ja'far, *Kitāb al-Kharāj wa-ṣan'at al-kitābah*, partially ed. M. J. de Goeje, *BGA*, Ⅵ, 1889［repr. 1967］

Yb：al-Ya'qūbī, *Kitāb al-Buldān*, ed. M. J. de Goeje, *BGA*, Ⅶ, 1892［repr. 1967］

Yq：Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, 5vols., Beirut: Dār Ṣādir, n.d.

Abun-Nasr, Jamil M., 1987, *A history of the Maghrib in the Islamic period*, Cambridge : Cambridge University Press

Aswad, Falāḥ Shākir, 1984, Dawr al-'Arab wa-'l-muslimīn fī rasm al-kharā'iṭ, *Buḥūth al-Mu'tamar al-jughrāfī al-islāmī al-awwal,* vol. Ⅲ , Riyadh:Jāmi'at al-Imām Muḥammad bn Sa'ūd al-Islāmīyah, pp.183－230

Beckingham, C. F., 1971, Ibn Ḥauqal's Map of Italy, *Iran and Islam: In Memory of the Late Vladimir Minorsky*, ed. Clifford Edmund Bosworth, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp.73－8.

Brice, William C.（ed.), 1981, *An Historical Atlas of Islam*, Leiden:E.J.Brill

Cornu, Georgette, 1985, *Atlas du monde arabo-islamique a l'époque classique*, Leiden : E. J. Brill

El Fasi, M.（ed.), 1988, *UNESCO General History of Africa*, vol.Ⅲ, *Africa from the Seventh to the Eleventh Century*, Paris:Unesco, London:Heinemann Educational Books, Berkeley : University of California Press

Garcin, Jean-Claude, 1983, Ibn Hawqal, l'Orient et le Maghreb, *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée*, 35, pp. 77－91

Goeje, Michael Jan de, 1871, Die Istakhrī-Balkhī Frage, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* , 25, pp. 42－58

Golvin, L., 1957, *Le Magrib central à l'époque des Zirides. Recherches d'archéologie et d'histoire*, Paris:A.M.G.

Hadj-Sadok, Muhammad（ed. & tr.), 1949, *Ibn Khurradâdhbih, Ibn al-Faqîh al-Hamadhânî et Ibn Rustih Description du Maghreb et de l'Europe au IIIe = IXe siècle*, Alger : Carbonel

Kamal, Youssouf, 1926－51, *Monumenta cartographica Africae et Aegypti*, 5 vols., Cairo［facsimile reprint, 6 vols., ed. Fuat Sezgin, Frankfurt : IGAIW, 1987］

Kennedy, Hugh（ed.), 2002, *An Historical Atlas of Islam*, Revised Edition, Leiden:E.J.Brill

Krachkovskiy, I.Y., 1957, *Izbrannye sochineniya*, vol. Ⅳ, *Arabskaya geograficheskaya literatura*, Moscow & Leningrad : Ak.Nauk SSSR

Kramers, J.H., 1932, La question Balḫī－Iṣṭaḫrī－Ibn Ḥawḳal et l'Atlas de l'Islam, *Acta Orientalia*, 10, pp. 9－30

Kramers,J.H., 1954, L'influence de la tradition iranienne dans la géographie arabe, *Analecta Orientalia* Ⅰ , Leiden : E. J. Brill, pp. 147－56

Kramers, J.H. & G. Wiet (tr.), 1964, *Ibn Hauqal Configuration de la Terre* (*Kitab surat al-ard*), 2 vols., Paris : G. P. Maisonneuve & Larose [repr., 2001]

Lévi-Provençal, É., 1950－53, *Histoire de l'Espagne musulmane*, 3vols., Paris : G.-P.Maisonneuve, Leiden:E.J.Brill

Lewicki, T., 1971, Du nouveau sur la liste des tribus berbères d'Ibn Hawkal, *Folia Orientalia*, 13, pp. 171－200

Lewis, Archibald R. 1951. *Naval Power and Trade in the Mediterranean A.D. 500－1100*, Princeton:Princeton University Press

Lopez, Robert S. & Irving W. Raymond, 1955, *Medieval Trade in the Mediterranean World*, New York:Columbia University Press

Maqbul Ahmad, Sayyid, 1995, *A History of Arab-Islamic Geography*, Amman : Al al-Bayt University

Marçais, Georges, 1946, *La Berbérie musulmane et l'Orient au Moyen-Age*, Paris:Aubier

Marin, Manuela, 1995, Runda, *EI*, Ⅷ, pp. 615－7

Miller, Konrad, 1926－31, *Mappae Arabicae : Arabische Welt-und Länderkarten des 9.－13. Jahrhunderts*, 6 vols., Stuttgart [repr., 2 vols. Frankfurt:IGAIW, 1994]

Miquel,André, 1967, *La géographie humaine du monde muslman jusqu'au milieu du 11e siècle*, Paris:Mouton

Miquel,A., 1971, Ibn Ḥawḳal, *EI*, Ⅲ, pp. 786－8

Miquel,André, 1975, La *géographie humaine du monde muslman jusqu'au milieu du 11e siècle* II, Paris:Mouton

Miquel,André, 2004, La description du Maghreb dans la géographie d'al-Içt'akhri, *Revue des mondes musulmans et de la Méditerranée*, pp. 231－9

Mu'nis, Ḥusayn Maḥmūd, 1967, *Tārīkh al-jughrāfīyah wa-'l-jughrāfīyīn fī 'l-Andalus,* Madrid : Ma'had al-Dirāsāt al-Islāmīyah [2nd ed., Cairo : Matkabat Madbūlī, 1987]

Murād, Ẓarīf Ramaḍān, 2004, *Dirāsat fī al-turāth al-jughrāfī al-'arabī Ibn Ḥawqal wa-manhaju-hu al-jughrāfī*, Cairo:Maktabat al-Anglū al-Miṣrīyah

Sezgin, Fuat, 1987, *The Contribution of the Arabic-Islamic Geographers to the Formation of the World Map*, Frankfurt:IGAIW

Sezgin, Fuat(ed.), 1992, *Studies on Ibn Ḥauqal* (*2nd half 10. cent.*) *and al-Iṣṭahrī* (*1st half 10. cent.*) *Collected and Reprinted*, Islamic Geography, vol.31, Frankfurt : IGAIW

Sezgin, Fuat, 2000, *Geschichte des Arabischen Schrifttums,* vol. X-XII, *Mathematische Geographie und Kartographie im Islam und Ihr Fortleben im Abendland*, Frankfurt : IGAIW

al-Shāmī, 'Abd al-'Āl 'Abd al-Mun'im, 1981, *Juhūd al-jughrāfīyīn al-muslimīn fī rasm al-kharā'iṭ*, Kuwait : al-Jam'īyah al-Jughrāfīyah al-Kuwaytīyah

Shawkah, Ibrāhīm, 1962, Kharā'iṭ kitāb al-aqālīm li-'l-Iṣṭatkhrī, *Majallat al-Majma' al-'Ilmī al-'Irāqī*, 17, pp. 3－28

Taha, 'Abdulwahid Dhanun, 1989, The Muslim conquest and settlement of North Africa and Spain, London: Routledge

Tibbetts, Gerald R., 1992, The Balkhī School of Geographers, *The History of Cartography*, vol.2, book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*, ed. J. B. Harley & David Woodward, Chicago : The University of Chicago Press, pp. 108－36

堀淳一 , 1997,『一本道とネットワーク』作品社

竹田新 , 2004,「地図学（イスラムの）」『歴史学事典』11, 弘文堂 , pp. 466－7

竹田新 , 2005,「バルヒー学派について」『関西アラブ・イスラム研究』 4 , pp. 77－93

竹田新 , 2008,「地図（イスラムの）」『歴史学事典』15, 弘文堂 , pp. 433－6

（2008. 11. 27 受理）